

学校の今に寄り添い、先生方とともに未来を描く

「ビューネクスト」高校版

# VIEWnext

2022  
December

# 12

特集

使うからこそ見えてくる

## ICTの

## 活用ポイント！

## 活用目的

指導変革の軌跡

### 広島県立西条農業高校

発問・課題設定をキーに見る

主体的・対話的で深い学び 授業実践

英語

愛知県立豊田南高校

### 中島浩平

体育

鹿児島県・私立鹿児島修学館中学校・高校

### 白川達也

Photo Session at Cover

静岡県立

### 掛川西高校



自分の殻を破る  
原動力は？

未来を描く！ 創る！  
イノベティブな  
生徒たち

第 10 回

## 教育格差の解消を目指して、 無料のオンライン塾を高校生が運営

はまだ そう た  
**濱田颯太**さん（高校3年生）

兵庫県・私立三田学園中学校・高校

### 教

育格差をなくすため、無料の  
オンライン塾の運営等を行う

学生団体「Get CHANCE」。同団体  
を立ち上げた濱田颯太さんが教育格  
差の問題に関心を持ったのは、高校  
1年生になった春、父親が経営する  
飲食店の売り上げがコロナ禍で減っ  
たことがきっかけだった。家庭の雰  
囲気も殺伐とする中で、私立の学校  
に当然のごとく通う自分が、いかに  
恵まれた環境で育ててもらっていた  
かを痛感したという。

「日本の子どもの7人に1人が貧  
困世帯だという事実は知ってはいま  
したが、自分自身が生活の不安に直  
面したことで、初めて教育格差を現  
実の問題として捉えました。そして、  
親の収入など、子どもの力ではどう  
にもならないことが理由で、子ども  
の今や未来を奪うようなことがあつ  
てはならないと考えました」

濱田さんは、臨時休業中に受けた  
オンライン授業の経験から、無料  
のオンライン塾を思いついた。しか  
し、実際に行動に移すのは容易では  
なかった。

「高校生の自分が教育格差の解決  
に取り組んだら、周りの人はどう思

読者の先生方がご存じの「イノベティブな生徒たち」をご推薦ください！

ご推薦いただける場合は、右の2次元コードをスマートフォン等で読み取っていただき、フォームに沿ってご推薦内容をご入力ください。



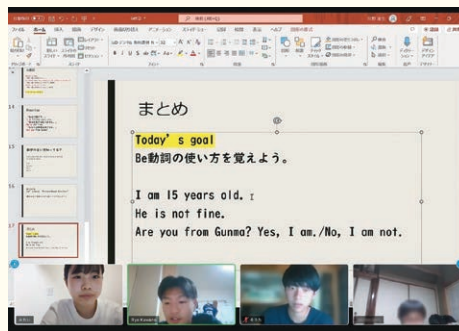
## 教師たち



兵庫県・私立  
三田学園中学校・高校  
高校3学年主任  
おおもと きょういち  
**大本共一**

### 自分の殻を破る 次の生徒を応援したい

経済的に苦しい家庭の子どものために、無料のオンライン塾を立ち上げようとしていることを濱田さんから聞いた時、私は、「クラスで率先してみんなのために動いていた彼が、ついに社会へ一歩踏み出し、見知らぬ誰かのために動き始めた」と感動しました。濱田さんは私に、「高校生にもできることはあるはずだから、自分の殻に閉じこもるのはやめようと思った」と話してくれました。次世代のリーダーを目指す同世代の仲間との出会いが、これほど人を突き動かすものなのかと、驚きながら彼の話を聞きました。濱田さんに触発された生徒の中に、不要になった書籍を集めて下取りに出し、貧困で苦しむ海外の人たちを救う活動に募金するといった次の動きも生まれています。あと一歩を踏み出せなかった生徒たちが、自分も殻を打ち破ってみようと思った時、みんなで応援する学校でありたいと思います。



無料のオンライン塾の開講に向けて、運営にかかわる高校生たちで行ったデモンストレーションの様子。

うだろうかと考えました。きっと『できるわけがないのに無駄なことを』と冷めた目で見られたり、『あいつ、何を粋がってるの』とSNSで嘲笑されたりするのではないか……。そ

## 転

んなことを考えてしまいました」  
機となったのは、高校2年生の夏、福岡県で開催された次世代のリーダーを養成するサマースクールに参加したことだった。全国から集まった約140人の高校生と、日本や世界で活躍する講師の話聞き、社会問題の解決について議論を積み重ねた2週間が、濱田さんを変えた。

「周囲の目を気にせず、自分の信念に基づいて行動している経営者の話を聞いたり、既に社会問題の解決のために活動を始めている高校生と話したりする中で、自分も殻に閉じこもっていないで行動を始めようと思った。そこで、サマースクー

ルの仲間たちに声をかけ、賛同してくれた27人と『Get CHANCE』を立ち上げました」

「Get CHANCE」の運営費用は、街頭募金やクラウドファンディングで集めた。そして、2022年6月、無料のオンライン塾が6人の中学生を受講生に迎えてスタートした。ボランティアの大学生や社会人が講師を務め、濱田さんら高校生は学習の取り組みなどの相談に乗っている。さらにオンライン塾と並行して、不要になった参考書や本を回収し、子ども食堂や児童館などに届ける取り組みも、全国の仲間と進めている。子どもをオンライン塾に参加させたいと思っている保護者との折衝

も高校生の仕事だ。相手の希望と自分たちにできることの間にギャップがあり、そのギャップを埋めるのに苦労することもある。また、『Get CHANCE』のウェブサイトに、「無料だと、子どもが『助けてもらって当然』という考えになってしまおう」「本当に支援を必要としている人には、そのやり方では届かない」といった批判が寄せられることもある。

「確かに、自分は恵まれていて、大変な人のことを本当に理解できているかどうかは分かりません。今の活動にも改善の余地は多いと思います。でも、仲間と一歩を踏み出した今、自分の至らなさに目を向けて萎縮するのではなく、みんなの力でもっとよりよい活動になることを信じ、続けていくことが大切なのではないかと考えています」

### 学校プロフィール

**設立** 1912(明治45)年  
**形態** 全日制/普通科/共学  
**生徒数** 1学年約280人  
**2022年度入試合格実績(現浪計)**  
国公立大は、京都大、大阪大、神戸大、大阪公立大、兵庫県立大などに118人が合格。私立大は、同志社大、立命館大、関西大、近畿大、関西学院大などに延べ1012人が合格。

3

特集

ICTの  
活用ポイント！  
活用目的  
使うからこそこそ見えてくる

- 巻頭 未来を描く！ 創る！  
イノベティブな生徒たち  
はまがそうた  
濱田颯太さん(高校3年生)  
兵庫県・私立三田学園中学校・高校
- 38 これからの進路指導のための  
世の中トレンド解説  
トレンド・ワード  
シェアリング・エコノミー
- 60 Reader's VIEW

<https://view-next.benesse.jp/>

本誌記事は、ウェブサイトVIEWnext ONLINEでもご覧いただけます。

印刷製本／(株)協同プレス  
編集協力／(有)ベンダコ  
執筆協力／二宮良太、長谷川 敦  
撮影協力／荒川 潤、福山 哲、松原 誠、ヤマグチイッキ  
※本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます。 ※本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます。  
©Benesse Corporation 2022

23 For School Section

24 お勧めの分掌▶ 管理職 教務担当 進路担当

指導変革の軌跡

広島県立西条農業高校

SSHを軸とした学校改革

# 専門教科と普通教科の連携 # 探究学習 # 融合教科 # 推薦指導

28 お勧めの分掌▶ 管理職 教務担当

—疑問や課題を解決！実践につながる！— 新課程レポート

テーマ「情報デザイン」の学びとは

インタビュー

Webサイトの制作を通じて、社会で求められる問題解決力を育成

# 「情報デザイン」の単元デザイン # デザイン思考 # ノーコードツールの活用

32 お勧めの分掌▶ 学年団 担任

輝く学年団を訪ねて

富山県立富山工業高校 2学年団

# 6学科の大規模校 # 基礎学力の向上 # 朝学習 # 1・2年次の進路指導

36 お勧めの分掌▶ 管理職

学校危機管理 基礎講座

テーマ インターネット利用に関するトラブル

# ネットいじめの予防策 # 責任の基本は保護者 # フィルタリングの重要性

39 For Teacher Section

40 お勧めの分掌▶ 教務担当 担任

発問・課題設定をキーに見る 主体的・対話的で深い学び 授業実践

40 英語

愛知県立豊田南高校 中島浩平

# 3か国の高校生とプレゼン # オンラインセッション # 世界を旅するような授業

44 体育

鹿児島県・私立鹿児島修学館中学校・高校 白川達也

# 生徒が授業者 # 2・3年生合同授業 # 競技を通じた探究学習 # 国際バカロレア

48 お勧めの分掌▶ 進路担当 学年団 担任

マイ・ストーリーを語る生徒を育む進路指導

東京都・私立桜丘中学・高校

1・2年次「マイ・ストーリー」の軸づくり

# 校外での体験を推奨 # 選択する場を設定 # ポートフォリオ

50 お勧めの分掌▶ 進路担当 学年団 担任

変化の激しい社会に飛び込む生徒に伴走 クローズアップ！ 就職指導

宮城県・石巻市立桜坂高校

自立に向けた自己理解の促進 1・2年次

# 本音を語るカフェスペース # 生徒の言葉を聴く # 就職支援員

52 お勧めの分掌▶ 学年団

チーム新課程学年主任

1月2月のポイント

# 1年間の総括 # 2学年に向けての準備 # 教師の得意を生かした学年運営

# 使うからこそ 見えてくる 活用ポイント・活用目的

以前の教育現場における ICT は、「校務用コンピューター」「電子黒板」など、どちらかと言えば教師側のツールであり、多くの学校において、生徒が主体となって ICT を使うのは、数学や理科、情報といった、一部の教科や場面だったと思います。しかし、ここ 10 年の間でのデジタル環境の進展に伴い、生徒が自分の学びや活動の内容・成果を電子化して記録・蓄積する e ポートフォリオや、教材や生徒の成果物などをインターネット上に保存したり、クラス内等で共有したりする教育クラウドが普及。そして、「GIGA スクール構想」によって、生徒が 1 人 1 台の端末を持ち、授業はもちろん、あらゆる学びや教育活動で、生徒と教師双方が ICT を使いこなすことが必要な時代となりました。言わば、ICT は「指導・支援のツール」だけではなく、「学びのツール」になりつつあるわけですが、そうした活用はまだこれから、という学校も少なくないようです。本特集の製作過程でお話を伺った先生方が口々におっしゃっていたのが、教師も生徒も「まずは使ってみる」「気軽に使ってみることができる環境をつくる」ということでした。使うからこそ見えてくる新しい景色、これからの 10 年を、本特集でまずはご体感ください。

VIEWnext 編集部 統括責任者 柏木 崇

P.4 **課題整理**

**ICT を生徒の資質・能力の育成に向けて効果的に使うために、教師が意識すべきこと**

青森県立八戸西高校 進路指導部主任 宮重太一

大阪府・私立関西学院千里国際中等部・高等部 進路情報センター長 米田謙三

広島県・私立修道中学校・修道高校 中学教頭 藏下一成

P.8 **実践事例 1 青森県立八戸西高校**

**ICT で指導の個別最適化を図り、主体的に学ぶ姿勢を引き出す**

▶ P.9 教科指導（数学） ▶ P.11 教科指導（英語、保健体育）

P.12 **実践事例 2 大阪府・私立関西学院千里国際中等部・高等部**

**生徒同士が多様な個性に触れながら、問題解決の思考プロセスを習得**

▶ P.13 教科指導（理科） ▶ P.14 教科指導（情報） ▶ P.15 進路選択

P.16 **実践事例 3 広島県・私立修道中学校・修道高校**

**「修道ベーシックルーブリック」と端末の普段使いで、未来への力を育む**

▶ P.17 教科指導（美術・数学・英語） ▶ P.18 「総合的な探究の時間」 ▶ P.19 学級運営

P.20 **本特集テーマのnext**

**教育データの利活用により、学習者・学校・行政はどう変わるのか**

東北学院大学 文学部 教授 稲垣 忠

# ICTを生徒の資質・能力の育成に向けて 効果的に使うために、教師が意識すべきこと

「GIGAスクール構想」の実現に向けた方策の1つとして、児童生徒1人につき1台の端末（以下、「1人1台端末」）の整備が進められている。高校では、整備中の学校や活用に着手したばかりの学校が多い一方で、先行して活用を進めてきた学校では、ICTを使うこと自体が目的の段階でとどまってしまうというケースも少なくないようだ。校内でICT活用の輪を広げつつ、自校の教育目標として掲げた資質・能力を生徒に育むために教師が意識すべきことは何か。3校の教師に話を聞いた。

まずは使ってみることで、  
効果を実感することも大切

——2021年1月の中央教育審議会でも、ICT活用について、「活用自体が目的でないことに留意が必要である」と指摘されていますが、ICTの活用が目的化している状況を、どのように思いますか。

**宮重** 公立高校の場合、コロナ禍も相まって、急速なICT環境の整備に戸惑っている教師が多いのは事実です。目的があってICTを使うというよりも、とりあえず使わなければいけないという意識

の教師もまだまだ多いのではないのでしょうか。

**米田** 既に一部の教師はICTを積極的に使って授業改善に役立てており、今はICTの活用をどのように学校全体に広げていけばいいのかを模索している段階なのだと思います。

**藏下** 本校では、19年度からBYODで1人1台端末を実現していますが、インフラが整ったばかりの頃は、まだチョーク&トーク主体の一斉授業が多かったと思います。そこから授業の形が変わるまで、それなりの時間がかかったこ

とから想像すると、生徒の資質・能力の育成を意識したICT活用の普及には、まだ時間がかかると考えます。

——そうした状況を変えるためには、どうすればよいのでしょうか。

**米田** まずは、何のためにICTを使うのかということを整理する必要があります。目的は、授業や校務の効率化と、主体的・対話的で深い学びを通じた資質・能力の育成だと思えますが、自校では何に力点を置くのかを校内で議論・共有することが大切です。

また、手段としてのICT活用

の大きなメリットである「コネクション」に注目することも重要だと思えます。それは、ICTによって、教師、生徒、保護者、そして地域が双方向につながることで、ICTの力をうまく活用すれば、学校を軸に多様な関係性を構築し、それらの関係性をどのように学びにつなげていくかを考えることもできるでしょう。

**宮重** 青森県は今年、1人1台端末が整備されたばかりです。そうした学校では、まずは使うことが目的になってもよいと思っています。本校でも、育成を目指す資



質・能力を意識することは必要だけれども、とにかく使ってみよう」と先生方に呼びかけて、今年度がスタートしました。実際、数学の授業では、「グラフの変化が、教科書の説明よりもイメージしやすい」といった声が生徒から上がり、数学が苦手だった生徒が主体的に学習に取り組むようになるなど、生徒の学びに早くも変化が生まれています。ICTの活用によってどのような資質・能力の育成が促

進されるのかは、生徒の変化を見取る中で強く実感できるものなのだと思います。生徒の変容や成長の話を校内で持ち寄る中で、「自分はこの資質・能力を伸ばすために、ICTをこのように使おう」などと意図し始める教師が増えていくのではないのでしょうか。

し、使ってみるからこそ、授業の課題が見いだされ、それにどう取り組んでいくかという話になるのだと思います。ただし、管理職やミドルリーダーの教師は、生徒の資質・能力の育成という視点を忘れてはならないと思います。

容・成長を実感する。その上で自校におけるICTの効果的な活用方法を見いだしていくという流れが大切ですね。では今後、ICTの活用が進んでいく中で、どのような点に留意すべきでしょうか。

### 青森県立八戸西高校 進路指導部主任

**宮重 太一** みやしげ たいち



教職歴23年。同校に赴任して2年目。数学科。

#### 学校概要

設立 1975（昭和50）年  
形態 全日制／普通科、スポーツ科学科／共学  
生徒数 1学年約240人  
2022年度入試合格実績（現役のみ） 国公立大は、北海道教育大、室蘭工業大、弘前大、岩手大、札幌市立大、青森県立保健大、青森公立大などに21人が合格。私立大は、東北医科薬科大、東北学院大、学習院大、駒澤大、日本体育大、明治大などに延べ92人が合格。

### 大阪府・私立関西学院千里国際中等部・高等部 進路情報センター長

**米田 謙三** よねだ けんぞう



教職歴22年。同校に赴任して6年目。地理歴史・公民科、情報科、総合探究科。

#### 学校概要

設立 1991（平成3）年  
形態 全日制／普通科／共学  
生徒数 1学年約100人  
2022年度入試合格実績（現浪計） 国公立大は、大阪大、岡山大、東京都立大などに5人が合格。私立大は、慶應義塾大、国際基督教大、上智大、中央大、東京理科大、同志社大、関西医科大、関西大、関西学院大などに延べ112人が合格。海外大学進学27人。

### 広島県・私立修道中学校・修道高校 中学教頭

**藏下 一成** くらした かずなり



教職歴32年。同校に赴任して29年目。美術科。

#### 学校概要

設立 1725（享保10）年  
形態 全日制／普通科／男子校  
生徒数 1学年約290人  
2022年度入試合格実績（現浪計） 国公立大は、東北大、東京工業大、東京大、一橋大、名古屋大、京都市立大、神戸大、九州大などに209人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ786人が合格。

自由に使え環境が必要

米田 本校の場合、すべての教育活動の根底に「探究的な学び」があります。課題発見、問題解決、リフレクションなど、それぞれのプロセスにおいて、ICTをどのように活用すれば活動が充実するのかがという点は、本校のすべての教師が常に考えています。

また、活用が進む中だからこそ忘れてはならないのは、ICTはあくまでもツールであるということです。本校では、教師や生徒が目的に合わせてコンテンツやソフトを自由に選択し、使いこなせばよいという考えを徹底しています。それぞれが使い勝手のよい方法を見つけていくことが、ICTを主体的に使うモチベーションにつながる。ICTの活用が目的化することを防ぐのだと思います。

藏下 私も、生徒がICTを使い

たい時、自由に使える環境の整備と学校文化の醸成が必要だと考えています。本校でも、6〜7年前までは、生徒のスマートフォンの持ち込みを禁止していました。そうした状況を振り返ると、私たちはまさに大きな意識改革を乗り越えてきたのだと改めて思います。

現在の本校の生徒たちは、自由にICTを使いこなしています。自分の思考を整理する際、タイピングスキルが低い生徒は、最初から端末に入力するのではなく、紙にメモを取り、ある程度、整理する方針が固まったところで端末に入力して清書し、それを「Classi」(\*1)のポートフォリオに蓄積しています。また、教師とのやり取りは「Classi」で行い、外部とのやり取りはGoogleの各ソフトで行うなど、生徒は自由にツールと使い方を選択しています。

**宮重** 教師がICTの様々な活用に挑戦する中で、ICTの機能やアプリのよさを実感することができれば、その次の段階として、「この資質・能力を伸ばしたい時には、このアプリを使おう」「こ

の活動については、従来の紙ベースが優れているので、ICTを使う必要はない」といった、ICT活用における取捨選択の視点が明確になってくると思います。私はICTを使い始めてまだ半年ですが、今はほぼ毎時間、ICTを活用した授業を行っています。それでも、生徒にメモを取らせる時や、定期考査などを見据えて演習問題を解かせる時など、紙ベースの方がよさそうだと思ったら、端末ではなく、ノートやプリント、問題集などを使わせるようにしています。

### ICTの活用方法・ねらいを整理した授業デザイン

**藏下** 授業をデザインする時、ICTの活用をどのように位置づけるのか、教師が見通しを持っておくことも大切です。本校では、目的意識を持ってICTを活用するために、「デジタル・タキノミー」(\*2)を全教科で導入しています(図1)。「タキノミー」は、単元の学習目標と評価について、

学習者を主語とする文言を使って授業を設計するフレームのことで、それに、ICTを活用した際の学習者の動きを記したものがデジタル・タキノミーです。

縦軸は知識次元で、事実に知識の上に概念的知識、手続きの知識、メタ認知的知識があります。横軸は認知過程次元で、記憶、理解、応用、分析、評価、創造と6段階が設定されています。授業内の活動が縦軸と横軸のどこに相当するのかを考え、学習目標と学習者の動詞(「発見する」「関連づける」など)を、生徒を主語にして記述します。

それにより、生徒は何のために何をするのか、そ

の際、ICTを含め、どのようなツールをどう使うのかがつまびらかになり、授業をどう組み立てるか、生徒にどんな声かけや発問をするとうかが考えやすくなります。

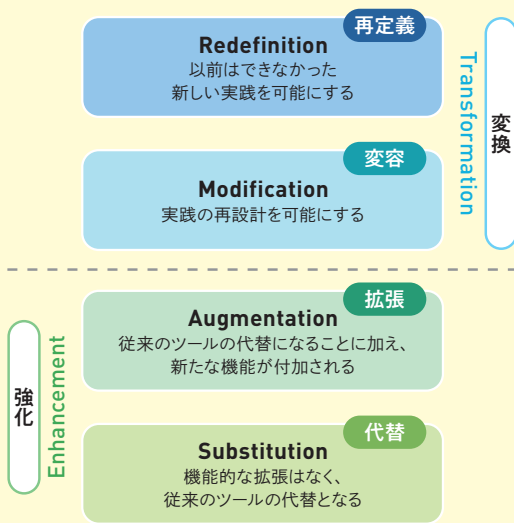
図1 修道中学校・修道高校が活用する「デジタル・タキノミー・テーブル」

知識次元	学習目標/学習者の動詞/道具・手立て	認知過程次元 (学びの深さ)					
		①記憶する	②理解する	③応用する	④分析する	⑤評価する	⑥創造する
A 事実に知識	学習目標						
	学習者の動詞 道具・手立て (ICTを含む)						
B 概念的知識	学習目標						
	学習者の動詞 道具・手立て (ICTを含む)						
C 手続きの知識	学習目標						
	学習者の動詞 道具・手立て (ICTを含む)						
D メタ認知的知識	学習目標						
	学習者の動詞 道具・手立て (ICTを含む)						

※学校資料を基に編集部で作成。

\*1 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。  
\*2 アメリカの教育心理学者ベンジャミン・ブルームによる教育目標分類学「ブルーム・タキノミー」を基に、ローラン・アンダーソンとD・クラースウォールがまとめたのが「改訂版タキノミー」であり、それにICTを活用した学習者の動きを加えることをアンドリュー・チャーチズが提案し、つくられたのが、「デジタル・タキノミー・テーブル」。

図2 SAMR (セイマー) モデル



教育における ICT 活用の段階を示すモデル。段階の内容と数は、下から「代替」、「拡張」、「変容」、「再定義」の4段階。拡張と変容の間に点線があるのは、変容の段階になると、ICT 活用が飛躍的に広がりを見せるためだ。同時に、教師と生徒のかかわり方も変化することが予想される。

出典 / Ruben R. Puentedura (2010) SAMR and TPACK: Intro to Advanced Practice の図を日本語訳

ICT活用の「次のステップ」を見通す

す。そうしたテーブルを作成することで、授業デザインが明確になり、生徒も教師も、ICTの活用目的が整理された状態で授業に向かうことができます。

**米田** 生徒を主語にした授業、デザインの視点は大切ですね。生徒が様々なICTツールを使い、探究的な学びを楽しみながら、変容を遂げていく。その際、教師はいつ、どのように生徒にかかわるのかを整理して、その成果を多面的に評価することが重要だと考えます。

—— ICT活用のプロセスを示すSAMR (セイマー) モデルによると、ICT活用は、「代替」↓「拡張」↓「変容」↓「再定義」という各段階を踏んでいくことが予想されます (図2)。各校では、次のステップに進んでいく際に、どのようなことを意識すべきだと考えていますか。

**宮重** 本校は、まずは使ってみるという段階 (代替) にあります。

今後は、ICTを活用することで得られた成果を持ち寄って、ノウハウを共有し、活用を学校全体の動きに広げていくことになると思います。今後、「代替」から「拡張」の段階にステップアップしていく中で、修道高校のように、ICTを活用する授業の流れを、教科ごとに体系化していく取り組みが必要かもしれません。

**米田** まず、各教科において言語活動の充実を図ったり、教科を横断した授業を設計したりすることで、生徒はICTを使って主体的に学びたいと考えるようになっていくでしょう。その上で、ICT活用に関する生徒の疑問に答える体制が校内に必要です。本校の場合、テクノロジーを扱う担当組織が、その役割を担っています。また、ICT活用に関するアンケートを定期的に実施し、ICTの導入時に検討した活用目的や活用計画と生徒、教師の現状を照らし合わせ、目的や計画の見直しを行うことも重要だと考えます。

**藏下** 初めて電子黒板機能つきプロジェクトターが設置された時、

本校の教師は板書を省くためのスライドを作りました。それがワイド型のプロジェクトターに代わると、スライドと一緒に別の映像資料を映すようになり、さらに1人1台端末が実現すると、一斉授業から個別最適な学び、生徒同士の意見交流による協働的な学びへと授業が変わりました。そのように、ツールが変わることで授業が変わる面もありますが、ICTの活用によって、一人ひとりの生徒がどう変わったのかを見取ることが、何より重要です。例えば、学びの成果をポスターセッションで発表することで、単元を重ねることに生徒の思考力や表現力が向上していく姿を、多くの教師が見てきました。ICTも同様に、その活用を通じて、生徒の学びが広がり、深まっていく過程を目のあたりにすることで、教師の実践もより深化していくのではないのでしょうか。

3校の取り組みの詳細を次ページから紹介

# ICTで指導の個別最適化を図り、主体的に学ぶ姿勢を引き出す

## 青森県立八戸西高校

ICT活用のねらいの1つである「個別最適な学び」の実現に向けて、全校を挙げて授業改善に取り組む青森県立八戸西高校。その背景には、個々の学びを支援することで、生徒の主体性を引き出したという教師の思いがあった。

### 多様な希望進路の実現には指導の個別最適化が必要

青森県立八戸西高校は、「分かる授業と自主的学習の習慣化」を学校経営目標の1つに掲げ、それを達成するための手段として、ICTを活用した授業改善を進めている。渡辺<sup>わたなべ</sup>学校長は、その背景にある課題を次のように語る。

「本校の生徒の希望進路は、大学から専門学校、就職まで幅広く、大学の志望学部も多岐にわたります。また、部活動加入率は9割以上で、家庭学習時間を十分に取っていない生徒もいました。そうした生徒の希望進路を実現する

ためには、進路指導・学習指導にも個別最適化が必要であり、生徒個別の支援が可能なICTを活用すべきだと考えました」

2021年度には、家庭学習を支援しようと、生徒所有の端末でも利用できるドリル学習中心の学習支援ソフトを導入。しかし、1回の解説動画が長いため、生徒の集中力が続かず、部活動に忙しい生徒はうまく活用できなかつた。また、問題と解説動画のみのソフトだったため、授業改善に活用しにくいといった声が教師から上がったと、濱田<sup>はまた</sup>茂男教頭は語る。

「分かる授業と自主的学習の習慣化」という目標に立ち返り、改

めてICT活用のあり方を教師間で議論すると、『授業内で生徒一人ひとりを支援できる機能が必要』などの意見が出ました。22年度に、生徒1人につき1台の端末が配備されることを受けてICT環境を見直し、生徒が問題に取り組み過程を把握できたり、生徒個別の課題に応じた出題ができたりするソフトウェアに切り替えました」

切り替えと同時に、ICTに関する校務分掌（P.10コラム参照）を新設し、ソフトウェアの操作方を学ぶ研修の実施や、授業での活用事例の共有などに努めた。その結果、教材の配信や生徒同士の意見交換に加え、ウェブテストの



校長  
**渡辺学**  
わたなべ・まなぶ  
教職歴37年。同校に赴任して3年目。



教頭  
**濱田茂男**  
はまた・しげお  
教職歴33年。同校に赴任して2年目。



進路指導部主任  
**宮重太一**  
みやしげ・たいち  
教職歴23年。同校に赴任して2年目。数学科。



スポーツ科学科主任  
**鈴木俊博**  
すずき・としひろ  
教職歴23年。同校に赴任して3年目。保健体育科。



数学科主任、2学年担任  
**西塚洋平**  
にしづか・ようへい  
教職歴20年。同校に赴任して4年目。数学科。



1学年担任  
**馬場豊樹**  
ばば・ひろき  
教職歴13年。同校に赴任して3年目。英語科。

※学校概要は、P.5をご覧ください。

結果に応じた課題を生徒個別に配信することによる、家庭学習の促進が実現するなど、ICTを活用した授業改善が進んでいる。

## 教科指導 (数学)

### ICT活用のポイント

問題の解答や振り返り  
に対して、こまめに  
フィードバックを行う

### 生徒の変化

意欲的に問題に  
取り組むようになり、  
意見交換も活発になる

毎授業、生徒自身が意識したい  
非認知能力を設定

進路指導部主任で3学年担当の  
宮重太一先生は、担当する数学で、  
クラス全員が主体的に学ぶ授業を  
目指して、ICTを活用した授業  
づくりをしている(写真1)。

ポイントの1つは、毎授業の目  
標設定と振り返りだ(写真1①⑧)。  
授業冒頭に、生徒自身が本時で意  
識したい非認知能力を設定し、授  
業の終わりには、どれだけ意識で  
きたかを自己評価し、学習内容を  
振り返る。生徒は入力した振り返  
りシートを宮重先生に送信。先生  
はそのシートを見て、「非認知能

力の意識が明確」「気づき・考えた  
ことが明確」などを評価規準とし  
て、各3段階で評価する(写真1)。  
教師と生徒との間で振り返りシー  
トのやり取りを繰り返すことで、

「1学期は『慎重』を意識すること  
ができたから、2学期は別の力を意  
識したい」などと、自己分析と次の目  
標の設定をするようになるという。

ICTの活用によって、生徒が  
答えに至るまでの過程をリアルタ  
イムで把握できるようになったこ  
とで、授業は一段と活性化した。

「生徒が自身の端末に入力する  
解答や疑問を、私は手元の端末で  
把握し、参考にしてほしい解答や  
疑問をその場で共有しています。

写真1 数学の授業 1コマの流れ(例)

#### 復習【15分】

- 冒頭1分間で、生徒は、本時で意識したい非認知能力(想像力、慎重などを例示)を、端末に配信される振り返りシート(写真1)を入力。
- 前時に学んだ問題に取り組む。解答は選択形式で、アンケート機能で集計。教師は、誤答の要因を解説する。
- 端末に配信される類題に取り組む。解答が終わった生徒は、周囲の生徒と不明点や考え方を共有。教師は、誤答の典型例を取り上げて解説する。

#### 本時の課題の解説【10分】

- 教科書のPDFを端末に配信。教師がそれに追記しながら、本時の課題の要点を説明する。

#### 問題演習【15分】

- 類題のプリントを配布し、生徒はその問題に取り組む。解答後、端末でプリントを撮影し、教師の端末に送信。
- 教師は、生徒から送信された解答を添削。個別の質問にも回答する。
- 問題につまずいている生徒のヒントになるよう、よい解答や間違いが多い箇所を電子黒板に映して、解説することもある(写真2)。

#### 本時の振り返り【5分】

- 授業冒頭に立てた目標の振り返りを入力(写真1)。

この授業で自分が意識する非認知能力		学習後どうであったか				
想像力		1	2	3	4	5
説明の段階	今日の自分の学びのプロセスをふりかえりましょう					
① 解くことができる	今回は解説で、三角形の外心、内心、重心について理解することができた。そして、3つ以外にも重心があることを思い出すことができたので良かった。また、課題では、行と列の関係を思い出して、図形で表した時に、どのような形かを想像し、ノートに書くことができたので、非認知能力はよくなったと思う。					
② 解き方を説明できる						
③ 解き方を説明でき、相手を納得させることができる						
まだ理解できていない学習内容	学習内容の理解度	1	2	3	4	5
なし	ふりかえりのレベル	1	2	3	4	5
	教師の自分へのメッセージ	図形を吟味する				

写真1 振り返りシートは電子化されているため、生徒と教師との間で、容易にやり取りができる。

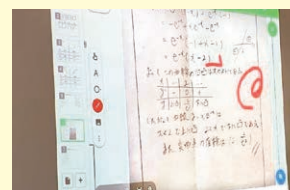


写真2 解答後のプリントの画像を電子黒板に映し、よい解法などを共有。

※学校資料と取材を基に編集部で作成。

その際、名前を挙げて、『よい解答(疑問)だね』と認め、生徒が積極的に自分の考えを表せるように努めています。また、正しく解いていなかったにもかかわらず、答えを消してしまっただけでなく、適切な

対応をすることができた場合もありました。一人ひとりをタイムリーに、適切に支援することで、生徒が主体的に学ぶ姿勢につながっていると感じています(宮重先生)

## 変化を視覚化することで、 学習内容の理解を深める

数学科主任の西塚洋平先生は、「数学を諦めさせない」を目標に、授業改善に取り組んでいる。端末を活用し、例えば、2次関数の平行移動では、生徒が自分で数値を入力し、グラフがどのように移動するのかを確認させている。

「ICTを使ってグラフや図形を描き、自分の手でそれらの位置や形を変化させることで、学習内容の理解が深まり、グループでの活発な意見交換にもつながります。生徒から、『式がどんなグラフになるのか、初めてイメージできた』といった声もよく聞かれます」(西塚先生)

題材にも工夫を凝らす。例えば、スポーツテストの結果を基に、「ある競技が上手な人は、それに似た競技も得意」であることを示す相関係数を提示し、相関が高い競技の予想を生徒間で共有する課題を出した。

「数学が苦手な生徒は間違いを恐れますが、『なぜ、そう思った

のか』に間違いはありません。そこで、数学への苦手意識をやわらげようと、題材に対する自分なりの意見を自由に述べる課題を取り入れました。そこを出発点に、数学的な見方・考え方に導くようにしています」(西塚先生)

## 弱点に応じた問題を テストの翌日に配信

2学年の数学では、生徒の学力に応じた問題の配信を始めた。模擬試験の1か月前から2〜3日おきに計9回、「Classi」(\*1)の分野別の復習テストを実施。テスト翌日、結果に応じて配信される問題に生徒は取り組み、端末で提出する。問題は複数配信されるが、1日3題以上の解答を推奨した。

「学びへの意識が高まっているテスト翌日に、自分の弱点に合った問題が配信されるので、生徒は隙間時間を利用するなどして、意欲的に取り組みます。理解の深まりに加え、主体的に学ぶ姿勢を支える取り組みになっていると感じています」(西塚先生)

## 校内の推進体制

### 各分掌の代表者が集まり、ICT専門の分掌を新設

八戸西高校は、ICT活用を推進するため、急ピッチで校内の環境を整備してきた。2021年度、県の支援により、端末80台と各教室に無線LANを配備。さらに、学校の予算で、教師1人につき1台の端末を購入し、職員室の無線LANも整備した。22年4月、生徒1人につき1台の端末が配備されたのを機に、「Classi」(\*1)及び「Classi note」(\*2)を全校で導入した。

生徒のために、授業動画を配信したい、家庭学習を支援したいといった教師の強い思いがあったからこそ、ICT活用が急速に進みました」

各教科・科目においてICTを活用した授業改善を進めているが、その原動力となっているのが、「学習支援システム(Classi)活用委員会」だ。進路指導部副主任、教務部副主任、各学年の代表者、各教科の代表者から成る校務分掌で、ICTに関する校内研修の企画・運営、実践事例の共有などを行っている。

各教科・科目で実践を積んだ結果、主体的に学ぶ生徒が増え始めている。家庭学習習慣が定着した生徒も多く、ウエブテストで弱点を把握し、その克服に取り組むなど、自己調整力やメタ認知能力を発揮する姿もよく見られるようになった。

急速に進んでいるICT活用だが、多くの教師が熱心に取り組んでいると、濱田教頭は語る。

今後の課題は、そうした肌で感じている成果を客観的なデータとして示すことで、授業改善を一層進展させ、情報活用能力の向上や論理的思考力の育成などにつなげることだ。

「生徒の主体性が発揮されつつある今、次の段階としては、社会で必要とされる資質・能力の育成も意識した授業改善を進めたいと考えています。まずは22年度末に、ICTの活用によってどのような資質・能力が高まったのか、効果検証を行う予定です。その結果を校内で共有し、全教科におけるICT活用の活性化を図っていきます」(渡辺校長)

「どの教師も、ICT活用の必然性を十分感じているのだと思います。コロナ禍で、健康でも出席停止とな

\*1 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社であるClassi株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。

\*2 「Classi」の連携サービス。生徒のアウトプットや協働学習を、リアルタイムで教師・生徒間で確認できる授業支援ツール。

## 教科指導 (英語、保健体育)

### ICT活用のポイント

動画を活用して、  
各自のパフォーマンスを  
より詳細に確認し、  
課題を具体化

### 生徒の変化

学び合いが活性化し、  
課題克服に向けて  
自ら学ぶように

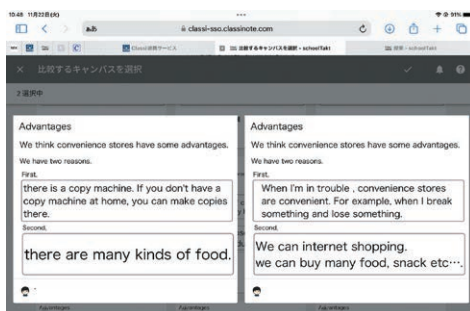
パフォーマンスを可視化し、  
客観的にスキルを評価

英語科では、1年次の学期末に行うパフォーマンステストを、英語のスピーチを撮影した動画をクラウドにアップして提出する方法にした。英語科の馬場豊樹先生は、その理由を次のように説明する。「教師との対面のテストでは緊張してしまう生徒も、動画の提出であれば自宅で落ち着いて取り組めますから、持っている力を十分発揮できると考えました。自分が納得するまでパフォーマンスを追究できるためか、聞き取った音声を文字化するアプリを利用して、

自分の発音の正確さを確認する生徒が増えています」

授業では、「Classi note」を活用し、英作文の解答を端末に入力させている(図2)。馬場先生は、各生徒の解答を手元の端末で確認しながら、表現が異なる解答を選択して電子黒板に表示し、「内容は同じですが、表現が違うよね」などと問いかけ、生徒によりよい表現を考えさせている。「パフォーマンスを端末で手軽に記録・確認できるようになり、生徒が自身のスキルを認識しやすくなりました。そうした利点を生徒に伝えて、端末の活用を促しています。生徒がメタ認知能力や自

図2 英作文の解答を端末で共有



※学校資料をそのまま掲載。

己調整力を発揮して、自分で課題を見いだし、一層主体的に学ぶようになることを期待しています」(馬場先生)

### 動画による緻密な検証で 生徒同士の対話が活性化

保健体育科では、新学習指導要領に示されている「豊かなスポーツライフの実現」に向けて、「楽しい体育」を目標の1つに掲げた。そして、「楽しい」を「できないことができるようになること」と定義し、ICTを技能の向上に活用している。

陸上競技のハードルでは、生徒同士で練習の様子を撮影。その動画を見て、「抜き足は低ければ、リード足が高い」「もっと手前で跳んだ方がよいのでは？」などと、跳ぶ時の高さや足の上げ方などについて意見を出し合い、課題の把握と技術改善に生かした。

以前は、生徒が目視で動きを確認し、それをワークシートに記入していたが、ハードルを跳び越えるのは一瞬で、目視で動作のよしあしを見極めるのは困難だった。しかし、ICTを活用するようになってからは、動画をゆっくり再生したり、一時停止したりしながら、一つひとつの動作をじっくり検証できるようになったため、生徒の対話も活性化し、学び合いの質が高まっていると、スポーツ科学科主任の鈴木俊博先生は語る。「生徒同士で検証・改善ができるよう、私が指導するのは、着目すべき動作のポイントについてのみです。思考力・対話力に加えて、運動種目への興味・関心も高まり、目標とする『楽しい体育』にもつながっていると感じています」

# 生徒同士が多様な個性に触れながら、 問題解決の思考プロセスを習得

## 大阪府・私立関西学院千里国際中等部・高等部

変化の激しい社会を生き抜く上で必要な資質・能力を育むため、探究的な学びの重要性が高まっている。学校という場が本来持っている多様性を尊重し、協働的で探究的な学びを進めている大阪府・私立関西学院千里国際中等部・高等部に話を聞いた。

### ICTの活用を通じて、 個性の発揮・伸長を図る

2012年度から全校生徒にタブレットの貸与を開始し、18年度からは、高等部の生徒に家庭で所有する端末の学校への持ち込みを認めるなど、早くからICTを教育活動で活用している大阪府・私立関西学院千里国際中等部・高等部。進路センター長の米田謙三先生は、様々な教育活動において生徒一人ひとりが個性を発揮したり、伸長させたりする上でICTは有効であると説明する。

「本校では、すべての教科の授業で、生徒自身が設定したテーマ

に基づいて探究的に学ぶことや、教科横断的な思考を重視しており、生徒はICTを駆使して、情報の収集やその整理・分析、まとめ・表現などの活動に取り組んでいます。その過程の中で生徒に育むのが、コンピューテーショナル・シンキングと呼ばれる問題解決に向けた思考プロセスです。ICTを活用した課題発見、問題のパターン化や解決のモデル化といった学びのプロセスの中で、社会で求められる批判的思考力やプログラミング的思考を生徒が身につけ、自分らしさを発揮しながら社会で活躍することができるようになることを目指しています」

ICTを活用した探究的な学びの中で思考プロセスを獲得させるためには、学びの目的を生徒自身が自分の言葉で語れることが前提だと、専門的成長主任として同校教師の専門性の向上と、教育活動全般の質的改善につながる方策を考える岡本竜平先生は語る。

「今学んでいることが、自分の人生においてどんな価値を持った学びなのか分かれば、生徒は安易に妥協せず、自分の考えにも批判的な目を向けます。そこで、問題解決のプロセスが生徒の内面に生まれるのです」

ICTを必須の教育ツールとして活用する同校だが、生徒の校内

でのICTの活用について、制限をかけたり、禁止したりすることはしていないと、技術科・情報科主任の西出新也先生は説明する。

「規制をしない代わりに、生徒がテクノロジーのよき使い手になるために、ICTの使い方やネット上でのマナーを学んだり、持続可能性やウェル・ビーイングとテクノロジーの関係について、生徒同士で対話をしたりする本校独自のデジタルシチズンシッププログラムを作成し、LHRや教科・情報などで実施しています」



専門的成長主任 (Head of Professional Growth)  
**岡本竜平**  
おかもと・りゅうへい  
教職歴11年。同校に赴任して6年目。理科。



技術科・情報科主任  
**西出新也**  
にしで・しんや  
教職歴13年。同校に赴任して4年目。情報科。



進路情報センター長  
**米田謙三**  
よねだ・けんぞう  
教職歴22年。同校に赴任して6年目。地理歴史・公民科、情報科、総合探究科。

※学校概要は、P.5をご覧ください。

## 教科指導 (理科)

### ICT活用のポイント

探究的な学びの  
成果物の作成で  
1人1台の端末を使用

### 生徒の変化

他者の多様な学びと、  
その共有・相互評価を  
経て、単元内容を  
体系的に理解

### 教科での探究的な学びに ICTを活用

ICTを活用した教科における探究的な学びの例として、岡本先生は、中等部での2つの実践を挙げる。1つは、「植物はどのような子孫を残すのか?」という問いに基づき、花の構造を説明する動画を制作する活動、もう1つは、「お天気情報番組を作ろう」というテーマ(写真)で、日本の天気の特徴を科学的に説明するオリジナルの情報番組を作る活動だ。いずれの活動もグループで取り組ませた。アウトプット物は学級内で共有し、生徒間で相互評価するこ

とにしたということもあって、どのグループも、理科的な内容の理解があまりないまま制作することがないように、繰り返し教科書を読んだり、ウェブサイトや書籍を調べたりしていたという。動画制作などで使用するアプリケーション(以下、アプリ)を、岡本先生はあえて指定しなかったが、生徒は作成したいアウトプット物にふさわしいアプリを探してきた。完成した説明動画や情報番組は、どれも表現方法がユニークで、解説上のポイントも多様だったと、岡本先生は振り返る。「履修範囲を超える発展的な内容を盛り込むグループもありまし

た。グループごとの学びも、グループ内の生徒一人ひとりの学びも、それぞれの興味・関心に応じて多様であり、アウトプット物の作成時点では、その単元の理解は一樣ではありませんでしたが、その後共有・相互評価を経て、知識が体系化していきました」

### 生徒の多彩な学びを 尊重し合う授業づくり

探究的な学びにおけるICTの活用は、協働性の発揮を促進すると岡本先生は語る。1人1台端末の環境下では、一人ひとりの生徒が自分の考えを発信できるように、グループ内で多様な意見が出やすくなり、それらを協働してまとめられるプロセスが欠かせなくなる。「電子など、目に見えないものをテーマにすると、生徒のアウトプット物は、私の想定を超えるユニークなものが多く出てきます。多様な表現方法や気づきの中からそれぞれのよさを見だし、尊重し合うことの大切さを生徒が実感できる授業づくりが、ますます求



写真 「お天気情報番組を作ろう」での生徒の活動の様子。

められると思います」ICTの活用によって生徒の学びが多様になる中で、ルーブリックに対する岡本先生の考え方も変わりつつある。「生徒主体の学びでは、評価基準を細かく設定するのではなく、ここまではクリアしてほしいという共通の目標だけを最初に示し、探究に取り組む中で、生徒たちと話し合いながらルーブリックを作れば、各グループにとって真に基準となるルーブリックができるのではないかと思っています」

## 教科指導 (情報)

### ICT活用のポイント

自分の問題意識を軸に  
プログラミングに  
取り組む

### 生徒の変化

問題解決の  
多様な切り口を知り、  
PDCAサイクルを  
回し続ける

問題を解決する力と、  
問題を提起する力を養う

同校の高等部の情報科では、「スマホアプリ開発」「アニメーション作成」など、11科目を設置しており、生徒は卒業までに2科目以上の授業を選択する。

「いずれの科目でも、プログラミングについて、体験レベルではなく、アプリやシステムそのものの概念を理解することができていくレベルまで到達することを目指しています。実体のないプログラミングを概念として理解できるようにすること、社会をよりよくするための仕組みを考え、創り出す

していく力が育まれるからです。将来、プログラマーやITエンジニアなどとしてシステム開発に関与することがなくても、プログラミングの概念に基づいた問題解決の力は、様々な分野で求められるはずです」(西出先生)

プログラミングの授業は、デザイン思考の切り口と、アート思考の切り口とで大別される。

「デザイン思考は、プログラミングを通じて『問題を解決するもの』で、アート思考は、プログラミングを通じて『問題を提起するもの』です。両方の切り口を知っておくこと、そして自分はどういう切り口からアプローチしている

のかを自覚することが大切です。プログラミングのスキルだけではなく、新しいものの見方・考え方を身につけてほしいと思っています」(西出先生)

### PDCAサイクルを 回し続ける教師の声かけ

「学校生活をよりよくしよう」をテーマとしたスマホアプリ開発の授業では、生徒が教師に質問や相談に行きやすくするために、各教師の空き時間を確認できるアプリを開発するなど、身の回りの問題解決にグループで取り組み、デザイン思考を学んでいた。また、メディアアートプログラミングの授業では、人の声や動きに反応するアート作品をグループで制作。人を楽しませる行為を通じてアート思考を磨いていった(図2)。

「問題解決と問題提起のいずれの切り口であっても、生徒は自身の問題意識を軸に活動します。アウトプットの段階に至るまでの進度はグループによって大きく異なりますが、早くできた生徒

図2 生徒が制作したプログラミング作品例



※学校資料をそのまま掲載。

たちに対して、『ここをこうしてみたら?』と問いかけることで、PDCAサイクルは回り続けます。ICTを活用した制作活動には終わりがなく、教師の声かけ次第で、生徒の思考を深め続けることができるのです」(西出先生)

情報の授業で身につけた考え方やスキルは、他教科の探究的な学びでも発揮される。西出先生は、「情報を、他教科間の学びを接続するハブとするために、今後は教科連携にも力を入れていきたい」と語る。

## 進路選択

### ICT活用のポイント

生徒が主体的に  
情報収集することで、  
進路選択のプロセスを  
可視化

### 生徒の変化

進路選択における  
自立と自律が  
促される

### 進路情報の一元管理で 担任の負担を軽減

高校1年生に相当する10年生は、教科や分野に偏らず、様々な授業から幅広く学ぶことだけでなく、学内外の活動に積極的に参加すること、特に長期休業などを活用して、オープンキャンパスや高校生向けの講座などに参加することが推奨されている。そうした

進路関係の情報発信は、Google Classroomと進路専用のウェブページで一元管理を行っている。また、進路行事だけでなく、調査書の情報や大学入学共通テストの出願、指定校制推薦について

も、Google Classroomで管理している。該当する生徒は自ら各ルームに登録し、メールなどで連絡事項を受け取るようにしたことで、クラス担任の負担が大きく軽減したと、米田先生は語る。

「本校の修学旅行は生徒が企画・運営します。旅行会社と、対面とオンラインで会議を重ね、行程や部屋割りを決めます。スキーのプログラムを盛り込んだ今年度、靴やウェアのサイズは生徒がGoogle Formsで集計し、旅行会社に伝えました。現地では、ICTで自由行動中の位置情報を確認するなど、生徒はICTを使って主体的に活動しました」

### 生徒が進路選択の過程を 三者面談でプレゼン

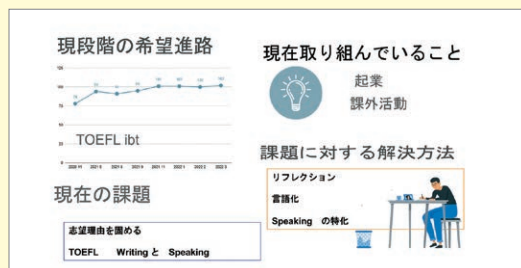
ICTを活用した授業を通して養われる問題解決に向けた思考プロセスは、進路選択の場面でも生きている。象徴的な場が、高校2年生に相当する11年生の3学期の三者面談で行われる「MY FUTURE PLAN」と呼ばれる生徒によるプレゼンテーションだ(図3)。生徒は、「高校生活で取り組んだこと」「身につけた力」「将来やりたいこと」をプレゼンテーションソフトでまとめ、担任と保護者に紹介した上で、「現在の志望」「志望実現に向けた問題と解決方法」を説明する。

「本校の教科学習では、『こんな問題を解決したい』『こんな疑問を解消したい』といった、一人ひとりの主体性が尊重されています。進路選択も問題解決のプロセスと捉え、生徒主体で進めるためにプレゼンテーション型の三者面談を実施しています。生徒本人がたくさん語りますから、教師は予断を持たずに生徒を理解できるよ

さもあります」(米田先生)

ICTをあらゆる教育活動で活用することで、様々な問題解決に向けた思考プロセスを生徒が経験している同校。米田先生は、生徒たちの様子から、「自立と自律が促されていると感じる」と話す。「ICTを活用することで、生徒は自分の個性を発揮しやすくなります。そして、学校という場には、様々な個性、価値観があることも気づきます。それを互いに認め合うからこそ、自立と自律が実現するのだと思っています」

図3 MY FUTURE PLAN



※学校資料をそのまま掲載。

# 「修道ベーシックルーブリック」と 端末の普段使いで、未来への力を育む

## 広島県・私立修道中学校・修道高校

生徒が目指すべき姿を「修道ベーシックルーブリック」に掲げた広島県・私立修道中学校・修道高校は、生徒が目的に応じてICTを使うようになることで資質・能力も高まると考え、学校生活のあらゆる場面でICTを活用している。

### 「学びのインフラ」として ICTを活用

広島県・私立修道中学校・修道高校は、2020年度、修道生として身につけてほしい「価値観」と「スキル」が示された「修道ベーシックルーブリック」を策定した。「価値観」は「世界貢献・開拓者・協働性・向上心・独立心」の5領域、「スキル」は「人間関係力・表現力・判断力・思考力」の4領域とし、各領域に2〜3のテーマを設定して、自分のレベルを高めるために必要な姿勢や行動を示している。そして、テーマごとに5段階の評価基準(図1)を設けることで、

生徒が自分の状態や、次に目指すべき姿をイメージしやすくなった。

生徒は、9月と3月に、同ルーブリックを基に自己評価をして自身の活動を振り返り、次の目標を立てる。一方、学年団は、生徒の自己評価を集計して各領域の達成度を算出。前回の自己評価からの変化を分析して指導改善を図り、PDCAサイクルを回している。

そのように、「修道ベーシックルーブリック」を教育の柱に据えている同校では、ICTを「学びのインフラ」と位置づけ、教材の配信や振り返りの蓄積、ウェブテストの実施、生徒・保護者との連絡など、教育活動のあらゆる場面で活用している。

で活用している。中学教頭の蔵下一成先生は、次のように語る。

「本校の教師が『デジタル・タキソノミー』(P.6参照)に基づき、目的意識を持ってICTを活用するのと同様に、生徒も目的や状況に応じてツールを選び、活用する経験を積み重ねることで、判断力や表現力、情報活用能力などが高



中学教頭  
**蔵下一成**  
くらしだ・かずなり  
教職歴23年。同校に赴任して29年目。美術科。



高校1学年主任  
**野上知宏**  
のがみ・ともひろ  
教職歴23年。同校に赴任して13年目。数学科。



高校1学年主任・教務部  
**森元雅貴**  
もりもと・まさき  
教職歴15年。同校に赴任して15年目。英語科。



高校1学年主任・広報室  
**鎌田祐介**  
かまた・ゆうすけ  
教職歴6年。同校に赴任して6年目。社会科(日本史)。

※学校概要は、P.5をご覧ください。

図1 「修道ベーシックルーブリック」の5段階の評価基準(抜粋)



上記のように、テーマごとにレベル1〜5の評価基準が設定されている。  
※学校資料を抜粋して掲載。

まっていくと考えます。生徒の学びの量を増やし、学びの質を高めるツールとして、ICTの活用を工夫しています」

## 教科指導 (美術・数学・英語)

### ICT活用のポイント

ポートフォリオで  
学びの過程を可視化する  
目的や利点を、生徒に説明

### 生徒の変化

「〇〇したいのですが、  
どうすればよいですか」  
と、目的意識を持った  
質問に変容

### 次のビジョンを描く 「ネタ帳」として活用

美術の授業では、作品の制作過程での気づきや課題、完成作品の画像などを残すポートフォリオとして、「Classi」(\*)のアルバムの機能を活用している(図2)。美術科の藏下教頭は、そのねらいを次のように語る。

「アルバムの機能は、その時々々に考えたことを残す習慣をつけるネタ帳として使おうと、生徒に伝えていきます。蓄積が多くなっても、手元の端末ですぐに確認できますし、自分の過去を振り返ることで、次のビジョンが見えてくるもので

す。取り組みを進めるうちに、生徒の質問が、『次に何をすればよいですか』から、『〇〇したいのですが、どうすればよいですか』に変わりました。メタ認知能力や向上心などの高まりを感じます」

また、単元ごとに「修道ベシックループリック」の中から育成を目指す資質・能力を明記し、作品の完成後、自己評価と相互評価を実施。アンケート機能で集計し、結果を授業改善に生かしている。例えば、今年度の高校2学年で取り扱った、『オルターピース』を題材に平和への願いをテーマとした単元では、「世界貢献」の自己評価があまり高くなかった。

図2 美術科 生徒のポートフォリオ(例)



この生徒は毎時間、制作途中の作品の画像もアルバムにアップし、次時に取り組もうと考えていることを入力している。  
※学校資料をそのまま掲載。

「単元を通して生徒が世界貢献について考えを十分深められていなかったことが、評価結果の数値化によって明確になり、主題を繰り返し発信する重要性に気づくことができました」(藏下教頭)

### 端末を使う意義を生徒と共有し、 いつでも使える環境に

数学科の野上知宏先生は、1トピック1分〜1分30秒間の動画を作成し、クラウド上で生徒に配信。授業中のグループ活動時の教材などとして活用している。1回の定

期考査の出題範囲分、動画は約80本、約90分間となる。定期考査前には、動画を何度も見返せば理解が深まることを、生徒に繰り返し伝えていくと、野上先生は語る。「私自身、動画を何度も見返し、説明の仕方や図の示し方などにおける改善点を見いだして、次の動画作成に生かしています」

英語科の森元雅貴先生は、生徒に端末を使う意義を説明した上で、授業中の端末の使用に制約を設けていない。生徒は、必要に応じて端末で調べ物をするほか、森元先生の指示がなくても、クラスメートとクラウド上で英作文や和訳を共有して学び合っている。

「端末の使用を制限しなければ、生徒が学習以外のことで端末を使用するのではないかといった声もあります。しかし、端末を使う場面を限定してしまうと、『今、知りたい』という生徒の意欲を削ぎかねません。大切なのは、端末を使う目的を生徒としっかり共有することです。それができている本校では、生徒が主体的・協働的に学ぶ姿がよく見られます」

\* 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。

# 「総合的な探究の時間」

## ICT活用のポイント

動画制作や事務作業など、ICTを総合的に活用する課題を設定

## 生徒の変化

優先課題を判断しつつ、作りたいものを粘り強く追究

### 資質・能力を総合的に育む活動として、動画制作を課題に

22年度の高校1年生の「総合的な探究の時間」では、「広島文化」をテーマとした3分間の動画制作を課題とした。生徒は8人ずつのグループを組み、ディレクターや記者、カメラマンなど、役割を分担。各グループ、食や防災などの7領域から1つを選択し、動画の内容を検討した。7月下旬には、テレビ局員から取材や動画制作の方法について指導を受けた上で、調査や取材を行い、夏季休業明けにテスト動画を制作した。各学級のクラウド上でテスト動画を共有

して感想や意見を述べ合い、テレビ局員からの講評も踏まえて、再取材や動画の修正を行い、10月末の文化祭で発表した。

調査や取材依頼、撮影・編集などの各工程ではICTを活用。夏季休業中は、メンバーがそれぞれ作業を進め、クラウド上で成果物を共有しながら活動を進めた。

「動画制作は、『判断力』や『表現力』など、『修道ベースシックルブリック』を総合的に伸ばすための課題として設定しました。9月の中間発表でテレビ局員から酷評を受けて、かえって火がついた生徒がいましたし、グループ内で意見の相違があっても粘り強く議論

し、自分たちが作りたいものの制作に没頭していました」(野上先生)

### 社会で求められるICTスキルを踏まえて課題を検討

動画制作では、「修道ベースシックルブリック」の中でも「判断力」の育成に重点を置いた。テレビ局から著名人の講演を提案されたが、それを断ったのは、生徒が事前知識のない状態で、訴求したいテーマを自分たちで見つけることから始め、取材先も自分たちで見つければ、自身で判断する場面がより増えると考えたからだ。

22年9月に実施した「修道ベースシックルブリック」の自己評価では、「判断力」にかかわるテーマの「優先課題及びその解決策を的確に判断して行動に移す力」が、前回の3月調査に比べて飛躍的に向上していた(図3)。

「活動中、教師は見守りに徹し、生徒が自分の判断で動けるようにしました。課題に真剣に向き合い、何度も壁にぶつかりながらも乗り越えた経験が、『判断力』の向上

図3 自己評価の結果(抜粋)

領域	ルーブリックテーマ	前回との差異
思考力	自分の選択がどういう結果を引き起こすかを推測する力	0.08
	情報を体系的につなげて因果・関連性を考える力	0.09
	物事を時に具体的に、時に抽象的に思考できる力	0.09
判断力	優先課題、及びその解決策を的確(論理的)に判断し行動に移す力	0.2
	大局を見据えて判断する力	-0.01

※学校資料を基に編集部で作成。

という結果につながったのだと思います。その中で、ICTは明確な目的の下で活用することで、間接的ですが、活動を支えるものとなってしました」(野上先生)

卒業生の著名人を主人公にしたドラマ仕立ての動画など、生徒の「思考力」や「表現力」の向上が見られる作品ばかりで、教師を驚かせた。

「動画投稿サイトが一般的に活用される中、日常生活や仕事でも、動画制作やプログラミングなど、より高次のスキルが求められるようになっていきます。そうした観点からも、課題設定が重要だと考えています」(藏下教頭)

## 学級運営

### ICT活用のポイント

学習時間を記録しやすい  
仕組みにした上で、  
学級ごとに学習時間を  
可視化し、学年内で共有

### 生徒の変化

1年次から  
家庭学習習慣が定着し、  
記録の内容も具体化

### 環境整備と教師の声かけの 両面から学習習慣を意識づける

生徒・保護者との連絡や家庭学習の把握にも、「Class」を活用している。その際に留意しているのは、生徒に任せっ放しにしないことだと、高校1学年担任の鎌田祐介先生は説明する。

「連絡事項を確認しましょう」「学習時間を入力してください」などと口頭で伝えるだけでは、行動に移さない生徒がいます。行動を習慣化させるため、活用のルールを設けた上で、担任が繰り返し声をかけています」

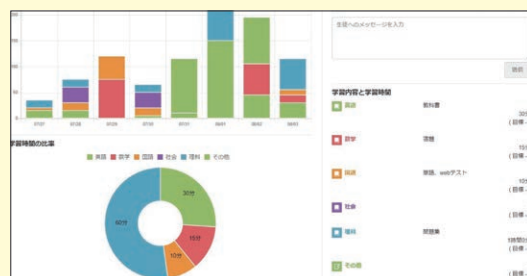
鎌田先生は、朝のSHRで、生

徒全員が「Class」を開く時間を

確保。連絡事項を確認したら、「見ました」ボタンを押すルールにしている。押していない生徒には、端末上で促すとともに、実際に声もかけるなど、閲覧が習慣化するまで粘り強く働きかけている。

夏季休業中は、家庭学習の習慣化に向けて、高校1年生全員に、家庭学習時間を「Class」に入力させた(図4)。担任は入力状況を毎日確認し、入力していない生徒には入力を促すメッセージを入力した生徒には励ましのコメントを送信。さらに、学級ごとの学習時間の総計を1年生のグループにアップし、1年生全員が見られ

図4 家庭学習時間のグラフ(例)



※学校資料をそのまま掲載。

るようにした。すると次第に、毎日学習時間を入力する生徒が増え、学習習慣が定着していった。鎌田先生は、教師の粘り強い働きかけが、「向上心」「独立心」を喚起したと感じている。

「生徒の中には、学習の記録として活用しようと、学習した内容まで入力する者もいました。自分でやり方を工夫できる生徒は、自分の学習スタイルを振り返り、課題を見つけて、主体的に学習に取り組めます。その積み重ねが、大

自身で学びや仕事の質を振り返る習慣として定着することを期待しています」(鎌田先生)

### 目標は、生涯蓄積できる ポートフォリオの構築

今後は、教育活動で活用しやすいソフトウェアを精選していく。

「利用するソフトウェアが多いと、アカウントやパスワードの管理が難しくなり、生徒は混乱します。教師がICTに頼りすぎることとで生徒を振り回さないよう、各ソフトウェアの効果を検証したいと考えています」(野上先生)

大学や社会へ続く「人生のポートフォリオ」を、生徒が蓄積できるようにすることも目指したいと、藏下教頭は語る。

「現在使用中のアカウントを使えるのは高校までです。大学進学後の活動実績や就職後のキャリアなど、生涯にわたって自身の学びを蓄積し、日常的に振り返って自分の課題を発見することで成長していけるようなポートフォリオを構築すべく知恵を絞っていきます」

# 教育データの利活用により、 学習者・学校・行政はどう変わるのか

教育データの利活用のための制度設計が、デジタル庁や総務省、文部科学省、経済産業省などによって進められている。2022年1月には、「教育データ利活用ロードマップ」が公表され、中長期で目指すべき姿が示された。教育データの蓄積・流通により、学校教育はどのように変容していくのか。文部科学省・経済産業省のICTに関する専門家会議の委員を歴任する東北学院大学の稲垣忠教授に、現状と展望を聞いた。



東北学院大学 文学部 教授

稲垣 忠 いながき・ただし

関西学院大学院総合情報学研究所博士課程修了。専門は教育工学、情報教育。日本教育メディア学会理事、日本教育工学会代議員、文部科学省・経済産業省の専門家会議の委員を歴任。著書に、『探究する学びをステップアップ！情報活用型プロジェクト学習ガイドブック2』、『ICT活用の理論と実践 DX時代の教師をめざして』（編著、北大路書房）など。

## 校内のICT活用に とどまらないインフラ改革

教育データの利活用が議論されるようになったのは、「GIGAスクール構想」によって、児童生徒1人につき1台の端末や学校内の高速大容量の通信ネットワークが整備され、膨大かつ多様なデータの蓄積が容易になったことが背景にあります。2022年に関係省庁が策定した「教育データ利活用ロードマップ」において、「誰もが、いつでも、どこからでも、誰とでも、自分らしく学べる社会」がミッションに掲げられているこ

とからも分かるように、ICT活用は学校内にとどまるものではありません。学びの多様化が進む中、学校外も含めて、生徒がいつでも、どこからでも学べ、地域や国内、世界の人とつながる環境を構築して、どのような教育を構築していくかが議論されています。

教育データの利活用の具体的なイメージを、学習者・学校・行政の別に見ていきましょう(図1)。学習者にとつての大きな利点は、自分らしい学びの実現です。授業動画や電子書籍など、ICTやデータを使うことで、興味・関心を広げたり、自分に合った学習

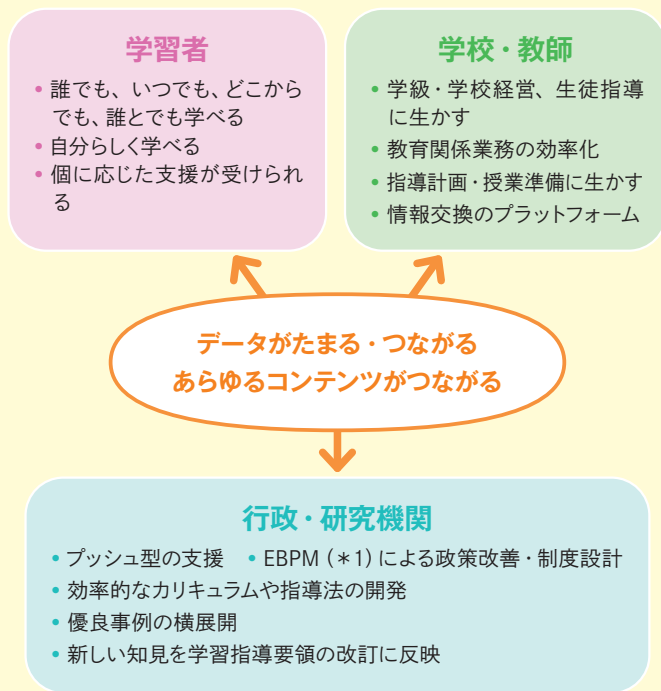
計画を立てたりするなど、様々な方法で、自分らしい学びの環境をつくることができます。

個に応じた支援が得られることも、重要な利点です。例えば、学力の差が大きいまま協働学習を行うと、議論についていけず、傍観者になってしまふ生徒が出てきてしまいます。そこで、デジタルドリルなどで学びの過程を可視化し、つまづいている生徒を手厚く支援するなど、自由進度による「個別最適な学び」で全体の底上げを図ります。そうして理解の差を縮めてから協働学習を行えば、学び合いは活発になり、より深い議論が展開されやすくなると考えられます。

## 学習指導要領ベースで 生徒の学びを可視化

学校にかかわる教育データは、学籍や学級数などの客観データである「主体情報」、学習指導要領や授業の題材にかかわる「内容情報」、学習記録や生徒指導の記録である「活動情報」の3つに大別されます。データの利活用によつ

図1 各立場における教育データの蓄積と流通の将来イメージ



※デジタル庁、総務省、文部科学省、経済産業省「教育データ利活用ロードマップ」(2022年1月)を基に編集部で作成。

て指導の充実に役立つ可能性があるのが、内容情報です。現在、デジタルドリルや授業支援ツールの活用が一般的になりつつありますが、ソフトウェアの相互連携は十分ではありません。例えば、デジタルドリルに生徒一人ひとりの学習履歴が蓄積されても、デジタル教科書に書き込んだ履歴とは連動しません。それらが学習指導要領ベースで連携することで、ソフト

ウェアを横断した生徒の学びを可視化できるようになります。生徒の日常のデータを蓄積・活用することで、生徒の変化を迅速に把握し、大事に至る前に専門家に相談することも可能になります。長期的にデータが蓄積されると、今までであれば気づけなかった生徒の小さな異変を察知しやすくなるわけです。行政では、新たな制度設計や優

教育データの利活用を進めるためには、セキュリティの整備が重要です。教育データの中には、個人情報に該当するものが多く、学習履歴は誰のものか、誰の権限でどう使ってよいか、いつまで保

**教師一人ひとりが倫理観を持ち、データと向き合う**

持、データと向き合う。教育データの利活用を進めるためには、セキュリティの整備が重要です。教育データの中には、個人情報に該当するものが多く、学習履歴は誰のものか、誰の権限でどう使ってよいか、いつまで保

持、データと向き合う。教育データの利活用を進めるためには、セキュリティの整備が重要です。教育データの中には、個人情報に該当するものが多く、学習履歴は誰のものか、誰の権限でどう使ってよいか、いつまで保

持、データと向き合う。教育データの利活用を進めるためには、セキュリティの整備が重要です。教育データの中には、個人情報に該当するものが多く、学習履歴は誰のものか、誰の権限でどう使ってよいか、いつまで保

持、データと向き合う。教育データの利活用を進めるためには、セキュリティの整備が重要です。教育データの中には、個人情報に該当するものが多く、学習履歴は誰のものか、誰の権限でどう使ってよいか、いつまで保

持、データと向き合う。教育データの利活用を進めるためには、セキュリティの整備が重要です。教育データの中には、個人情報に該当するものが多く、学習履歴は誰のものか、誰の権限でどう使ってよいか、いつまで保

持、データと向き合う。教育データの利活用を進めるためには、セキュリティの整備が重要です。教育データの中には、個人情報に該当するものが多く、学習履歴は誰のものか、誰の権限でどう使ってよいか、いつまで保

\* 1 Evidence-based Policy Making の略称。政策の企画をその場限りのエピソードに頼るのではなく、政策目的を明確化した上で、合理的根拠 (エビデンス) に基づくものとする。 \* 2 大阪市の取り組みは、『VIEW next』教育委員会版 2021 年度 Vol.3 の特別企画「先駆的・戦略的な教育改革」(P.26 ~ 29) で紹介しています。ウェブサイト『VIEW next ONLINE』の「学校教育情報誌『VIEW next』」の教育委員会版バックナンバーからご覧ください。

う上での倫理観が問われます。

## リテラシーを身につけ、 データを基にした授業改善を

今後のロードマップは、図2の通りです。現在は基盤となるルールづくりの段階ですので、現場での授業や学習に大きな変化はありません。中期目標で何より求められるのは、教育データの蓄積に向けて、生徒がICTを日常的に使う状況をすべての学校で実現することです。学習履歴が自動的に蓄

積されるようになると、そのデータをどう活用するかが、学校が最初に向き合う課題になるでしょう。ただし、生徒の生活・健康面のデータは、各学校の判断で扱えるものではありません。蓄積したデータの整理や活用方法は、各自治体における今後の議論に左右されます。

長期目標には、学習者が生涯にわたって自らのデータを蓄積・活用する姿が示されています。学年や学校をさかのぼって学び直しができる環境が整うため、生徒が自

分に必要な学びを選び取れるように動機づけすることが大切です。生徒の特性やキャリア観に応じて最適な教材を提示する知識・技能も、教師に求められるでしょう。

教師がデータに基づいて柔軟に授業を見直す力も大切になります。自分ではよい授業をしていると思っけていても、生徒の力が伸びていなければ、客観的にはよい授業をしていないとも言えません。教育データを活用し、生徒一人ひとりの変化や学級全体の状態を正確に把握した上で、取り上げる題材

や授業展開、使用するICTなどを検討することが求められます。教師の多忙化の解消が課題である今、教育データの活用という新たな業務が加わるのではないかと、不安を抱く方もいるかもしれませんが、しかし、民間企業では、業種や職種を問わず、業務の効率化や質の向上のために、デジタル化とデータ活用が進められています。教師にも、データを読み取り、客観的に物事を捉えて考えるリテラシーが必要です。

### 図2 教育データ利活用の目指す姿

#### 短期（～2022年頃）

- ・教育現場を対象にした調査や手続きが原則オンライン化
- ・事務等の原則デジタル化など、校務のデジタル化を進め、学校の負担を軽減
- ・インフラ面での阻害要因（例：ネットワーク環境）の解消
- ・教育データの基本項目（例：法令や調査で、全国で共通的に取得されている主体情報）が標準化

**論点・課題**  
情報が紙で処理されており、調査や事務の負担が重い

**目指す姿**  
調査等のオンライン化で、校務負担が軽減

#### 中期（～2025年頃）

- ・学習者が端末を日常的に使うようになり、教育データ利活用のためのログ収集が可能
- ・内容・活動情報が一定粒度で標準化され、学校・自治体間でのデータ連携が実現
- ・学校・家庭・民間教育間でのそれぞれの学習状況を踏まえた支援が一部実現

**論点・課題**  
学校や自治体間のデータ同士の結びつきがない

**目指す姿**  
データの標準化により、EBPMの推進や新たな教授法・学習法の創出

#### 長期（～2030年頃）

- ・学習者がPDS（\*3）を活用して、生涯にわたって自らのデータを蓄積・活用することができるように
- ・内容・活動情報のさらに深い粒度での標準化が実現
- ・支援を必要とする子どもへのプッシュ型の支援が実現
- ・真に「個別最適な学び」と「協働的な学び」が実現

**論点・課題**  
「学校で」「教師が」「同時に」「同一学年の児童生徒に」「同じ速度で」「同じ内容を」教えるという、学習指導の基本的な枠組みでは十分に対応できない可能性

**目指す姿**  
誰もが、いつでも、どこからでも、誰とでも、自分らしく学べる

※デジタル庁、総務省、文部科学省、経済産業省「教育データ利活用ロードマップ」（2022年1月）を基に編集部で作成。

教育データの利活用と言っても、統計やデータ分析の専門知識が求められるわけではありません。これまでも、授業づくりをする際に、テストの結果や生徒が振り返りシートに書いた内容などを参考にしていたはずで、それと同じように、データから学習や指導の成果と課題を効率よく把握し、生徒一人ひとりの学びを支える授業にチャレンジしてみてください。教師の意思決定と生徒の自立的な学びを助けるツールが増えると捉えて、教育データに向き合っています。

\* 3 Personal Data Storeの略。他者保有データの集約を含め、個人が自らの意思で、自らのデータを蓄積・管理するための仕組みであり、第三者への提供に係る制御機能（移管を含む）を有するもの。

# For School Section

学校改革や組織運営に役立つ  
事例や情報を、  
先生方の思いを乗せてお届けする

P.24

## 指導変革の軌跡

その時、教師は何を考え、どう動いたか。  
学校改革の過程を当事者の言葉で追う

お勧めの分掌 ▶

管理職

教務担当

進路担当

### 広島県立西条農業高校

#### SSHを軸とした学校改革

専門教科と普通教科の教師が垣根を超えて連携し、  
農業の発展に本気で取り組む生徒を育む

P.28

— 疑問や課題を解決！実践につながる！ —

## 新課程レポート

ベネッセ教育情報センター

現場が直面する課題や疑問の解決に  
つながる事例や解説記事を提供

お勧めの分掌 ▶

管理職

教務担当

### 「情報デザイン」の学びとは

インタビュー

Webサイトの制作を通じて、  
社会で求められる問題解決力を育成

P.32



## 学年団を訪ねて

学年経営に悩む先生方に！  
チームづくりの秘訣を掘り下げる

お勧めの分掌 ▶

学年団

担任

### 富山県立富山工業高校 2学年団

担任が動きやすい環境づくりで、  
個性豊かな6学科をつなぐ

P.36



お勧めの分掌 ▶

管理職

いざという時の対応は平時の準備で決まる。学校危機管理の専門家が解説

### インターネット利用に関するトラブル

広島県立西条農業高校

# SSHを軸とした学校改革

専門教科と普通教科の教師が垣根を超えて連携し、  
農業の発展に本気で取り組む生徒を育む



## 学校概要

- ◎設立 1910 (明治 43) 年
- ◎形態 全日制／農業科 (園芸科、畜産科、生活科、農業機械科、緑地土木科、生物工学科、食品科学科)／共学
- ◎生徒数 1 学年約 280 人
- ◎2021 年度進路実績 (現役のみ) 国公立大は、帯広畜産大、鳥取大、広島大、愛媛大、琉球大などに 19 人が合格。私立大は、酪農学園大、明治大、近畿大などに延べ 90 人が合格。短大・専門学校進学 87 人。就職 53 人。

## 変革の背景

高度な研究は、自校の生徒に必要か。  
不安を抱いた教師たち

2020 年度に創立 110 周年を迎えた広島県立西条農業高校は、県内の農業高校の拠点校だ。大学入試において専門学科を対象とする推薦入試の募集枠が増え始めた約 20 年前から、進学指導にも力を入れており、以来、毎年 20 ～ 30 人が国公立大学に合格している。12 年度には、農業高校として全国で初めて SSH (\*1) の指定を受けた。しかし、教師は、その活動に戸惑いがあった。当時、非常勤講師として同校に勤務していた現 2 学年

主任の石井朝子先生は、次のように振り返る。「私は、畜産の現場で、一生産者として良質な家畜を育てるための知識や技術を、生徒に身につけさせたいと考えていました。しかし、SSH でより高度な研究に取り組むとなれば、家畜に直接触れて学ぶ時間が少なくなるのではないかと不安に思いました」  
また、指定 1 年目は、指導体制を構築する途中で、専門教科の教師を中心に、実験準備などの業務負担が大きくなっていった。そうした教師の不安や負担感を払拭したのは、生徒の姿だった。広島大学を始めとする大学や、産業技術総合研究所などの研究機関から支援を受けながら、「ニワトリが卵を産む前に、ヒナがオスカメスカを判別する方法」

などの最先端の研究に、生徒は興味津々に取り組んだ。研究成果が学外の発表会で入賞すると、周囲の生徒は刺激を受け、ますます高いレベルの研究に挑戦するようになった。「SSH の活動で最先端の研究に触れ、それに食いつき、自ら工夫して研究を進める生徒を目にして、生徒の可能性の大きさを改めて感じました。生徒が真剣に学び始めるきっかけは、一人ひとり異なります。SSH の活動によって、生徒の心にスイッチが入る場面がより多くなったと、SSH の活動を肯定的に捉えるようになりました」(石井先生)  
SSH の指定 3 期目の現在は、専門教科と普通教科が一体となって活動を進めている。その体制構築の過程を見ていく。

\*1 文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール」の略。

# 変革の一手

生徒が探究を深める資質・能力を、  
専門・普通の全教科で育成

同校のSSHの活動の軸となるのは、1年次の「アグリサイエンス」、2年次の「SS課題研究Ⅰ」、3年次の「SS課題研究Ⅱ」だ。1年次の「アグリサイエンス」では、「作物の成長と養分」「農業と食料問題」などの題材の中から、生徒は自ら設定した課題に取り組み、探究のプロセスを2回、経験する。

同じ題材でもう1度探究することで、「新たな課題の発見→新たな仮説の設定」の場を設け、探究がより深化するようにしている。そうした活動を通して、科学技術リテラシー（課題発見・解決の過程で必要となる能力）を身につけ、2・3年次の「SS課題研究Ⅰ・Ⅱ」では、生徒は自身の専門分野に基づいて自ら設定したテーマについて研究する（図1）。「アグリサイエンス」では、各学科20人ずつの2つのグループに分け、農業科と理科の教師が交互に授業を担当した。農業分野の視座・知識と、自然科学に求められる思考・態度

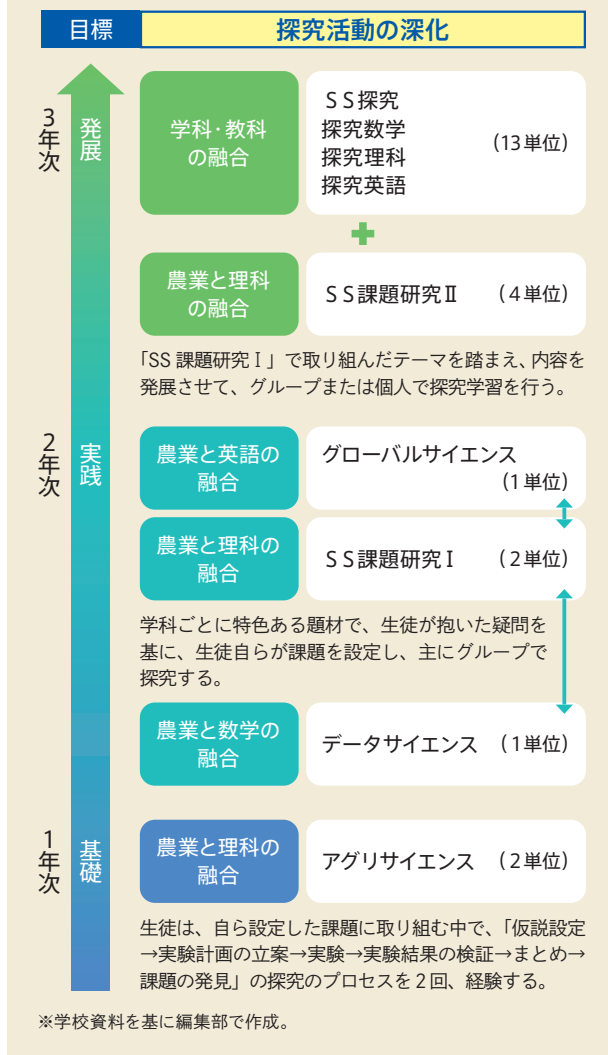
度の双方を身につけられるようにするためだ。SSH研究開発主任の堀内敬士先生は、次のように説明する。

「SSH1期では、『SS課題研究Ⅱ』を農業科と理科の協働で指導していましたが、SSH2期では、その体制を『SS課題研究Ⅰ』にも広げました。生徒が自然現象をより分析的・論理的に思考できるよう、理科の教師が、農業科の教師とは異なる視点で生徒に助言するためです。指導を分担し、一部の教師に負担が集中することのないようにするねらいもありました」

SSH1期では、取り組みの柱の1つである「海外連携等により国際性を育てるための教育プログラムの開発」の一環として、2年次に「SSグローバル英語」や「英語プレゼンテーショントレーニング」を設置。英語科が指導を担当し、研発表と質疑応答ができる英語力を育成した。SSH2期からは、アンケート結果から多くの生徒が実験結果の分析を苦手としていることが分かったことを受け、数学科が、実験結果の解析方法などを実践的に学ぶ「データサイエンス」の講座を、放課後や夏季休業中に実施した（\*2）。

SSHの活動に普通教科も組み込むことによって、担当教科の垣根を超えて指導にあたる体制が築かれていったと、SSH総務主任

図1 1～3年次の探究学習の流れ(2022年度入学生～)



\*2 「データサイエンス」の講座は、2022年度から学校設定科目としている。

の丸川晋一先生は語る。

「授業で直接指導していなくても、年度末に開催する研究成果発表会の準備を担当するなど、全教師が何らかの形でSSHの活動にかかわっています。そこで主体的に活動する生徒の姿に触発されて、普通教科の教師もSSHの活動に積極的に取り組んでいます」

進路指導も、学校全体で取り組んでいる。大学進学志望の生徒にはまず、「SS課題研究II」の担当教師が、チューターとして、志望理由書の作成などの指導にあたる。そして、志望理由書の完成度を高めるために、学級担任や部活動の顧問などにも指導を仰ぐ。進路指導部長の中村晃寛先生は、次のように語る。

「志望理由書の作成指導は、生徒の研究を間近に見て、その特長を把握している探究学習の担当教師が最も適任です。ほかの教師は、文章の論理性を確認したり、面接指導を担当したりします。生徒には、複数の先生に相談しようとしており、教師も、生徒から頼まれば、教科や学年を超えて対応しています」

### 農業の発展のために何ができるのか。 視座を高める生徒たち

農業に関心があっても、中学校までの学習で、普通教科を苦手とする生徒は少なくない。そうした生徒も、SSHの融合科目で学ぶ

ちに、実験には数学や理科の知識と見方・考え方が必要であり、研究成果を他者に伝えるためには、国語力や英語力が必要だと実感して、学びへの姿勢が前向きになる。そうした生徒の変容は、教師がSSHの活動に取り組み原動力にもなった。

さらに、SSHの活動に取り組むうちに、生徒の農業に対する視座が上がり、進路意識が変化していくと言う。

「SSHの活動を通じて大学の研究者や農業技術センターの技術者と接する機会が増えたことで、生徒は、現場の生産者以外にも、研究者や技術者として農業の発展に貢献するかわり方があることを知ります。自然とキャリア観が広がり、研究者や技術者になるためには、大学で農学や畜産学などを学ぶ必要があると考え、進学意識も学習意欲も高まっています」(石井先生)

学ぶ目的が明確になったことで、学力が大きく伸びていく生徒は多く、SSH事務局長の平崎裕樹先生は語る。

「地元の塾の方から、その塾に通っていた本校の生徒が、普通科の進学校の生徒と比べて、1年生の時には学力の差が大きかったが、その後どんどん伸びて、卒業時には並んだと聞きました。『西農の生徒は伸び率が違いますね』と言われた時に、本校の指導が間違っていないかったことを確信しました」



教頭  
**藤井典之** ふじい・のりゆき  
教職歴30年目。同校に赴任して1年目。



主幹教諭・SSH事務局長  
**平崎裕樹** ひらさき・ひろき  
教職歴31年目。同校に赴任して2年目。外国語科(英語)。



進路指導部長  
**中村晃寛** なかむら・あきひろ  
教職歴10年目。同校に赴任して6年目。数学科。



SSH総務主任  
**丸川晋一** まるかわ・しんいち  
教職歴24年目。同校に赴任して2年目。理科(生物)。



SSH研究開発主任  
**堀内敬士** ほりうち・けいし  
教職歴10年目。同校に赴任して6年目。理科(化学)。

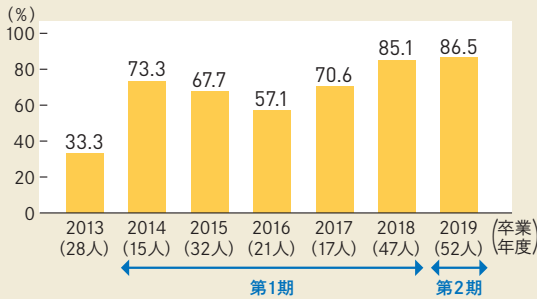


2学年主任  
**石井朝子** いしい・あさこ  
教職歴9年目。同校に赴任して2年目。農業科。

生徒に実施したアンケート調査の結果では、「SSHでの活動を経験したことで、粘り強く取り組む姿勢(グリット)が向上したか」の項目で、毎年約90%が肯定的回答をしている(図2)。また、大学の理系学部に進

図3 卒業生(大学2年次)へのアンケート結果

■ 在学中は、「実験等に失敗しても諦めずに取り組む」ような生徒でしたか。



注) 数値は、「とてもそう思う」「まあそう思う」の合計。  
※学校資料を基に編集部で作成。

図2 生徒へのアンケート結果

■ SSHでの活動を経験したことで、粘り強く取り組む姿勢(グリット)が向上しましたか。

年度	1年生	2年生	3年生	平均
2017	91.0	89.7	87.3	89.4
2018	76.9	87.2	92.9	85.7
2019	89.6	88.4	97.4	91.8
2020	92.7	91.7	92.1	92.2
2021	78.6	88.3	92.4	86.4

注) 数値は、「とてもそう思う」「まあそう思う」の合計。  
※学校資料を基に編集部で作成。

## 変革の成果・展望

大学との連携を強化し、  
生徒がわくわくする研究を支えたい

専門教科と普通教科の連携をより進めるとともに、大学等の外部の協力を得ながら活動の深化を図ろうと、SSH3期目に入った22年度は、新入生の教育課程を刷新した。講座だった「データサイエンス」を、2年次の学校設定科目として設置し、「SSグローバル英語」は、科目名を「グローバルサイエンス」に変更。どちらの科目も、指導の際に教師が農業に関する知識を持っている方が望ましいため、農業科の教師も授業に加わることにし

学した卒業生への追跡調査では、「高校在学中は実験等に失敗しても諦めずに取り組む生徒だったか」の項目では、SSH指定前の13年度の卒業生と比べて、14年度以降の卒業生は肯定的回答率が大幅に高かった(図3)。「SSHの活動に対する肯定的回答の割合は、在校生も卒業生も期を追うごとに高くなる傾向にあります。学校全体で取り組んできたことで、活動の質が深化し、生徒が大きく成長している手応えを、教師一同感じています」(堀内先生)

た。そして、3年次に、「SS探究」「探究数学」「探究理科」「探究英語」を選択科目として設置した(P.25図1)。

「SS探究」は、よりレベルの高い研究に挑戦する意欲的な生徒を対象とした科目だ。協定を結んだ大学に向いたり、オンラインで大学教員からの指導を受けたりしながら、生徒は研究を深めていく。6単位とし、週1日、終日じっくり研究に取り組めるようにした。

「探究数学」「探究理科」「探究英語」では、同校の教師や大学教員からの支援を受けながら、生徒は自分で学習の課題を分析し、学習内容と方法を自分で考えて、学習も自身で進める。教師による講義などではなく、主体的に学びに取り組むことを通じて、大学で学ぶ上で求められるレベルの数学・理科・英語の学力を育むことをねらいとしている。

藤井典之教頭は、SSH3期目の展望を次のように語る。

「『SS探究』や『探究数学』などの科目が実際に始まるのは、現1年生が3年生になる24年度からです。それまでに協定締結先の大学との協議をしっかりと進め、内実の伴った活動にすることが今、最も重要な課題です。生徒がわくわくしながら研究に取り組める新しい農業高校のモデルの構築を目指し、教師一丸となって今後も歩み続けていきます」

新学習指導要領がスタートした2022年度、学校現場には資質・能力を育成するための指導と評価を積み重ねながら、より自校に合った形へと軌道修正していくことが求められる。現場が直面する課題や疑問を解決し、よりよい計画・実践につながる情報を提供する。

— 疑問や課題を解決！実践につながる！ —

## 新課程レポート

ベネッセ教育情報センター

テーマ

# 「情報デザイン」の学びとは

大学での学びや社会に出た時にも生きる、  
問題解決力を育む「情報デザイン」

教科・情報の指導のあり方を見直す動きが高校現場で広がっている。その背景には、本誌10月号でも取り上げたように、新学習指導要領で「情報Ⅰ」が共通必修教科目となった上に、2025年度大学入学共通テストの出題教科・科目等に「情報Ⅰ」を新設すると発表されたことがある。そうした動きに適切に対応し、

### インタビュー

## Webサイトの制作を通じて、 社会で求められる 問題解決力を育成

多様で複雑な問題を解決する  
力を養う「情報デザイン」

「情報Ⅰ」は、「情報社会の問題解決」「コミュニケーションと情報デザイン」「コンピュータとプログラミング」「情報通信ネットワークとデータの活用」の4章で構成されますが、その中の「情報デザイン」は、どのような学び

を通して、どういった力を育成する分野なのでしょう。

白戸 「情報デザイン」の学習のねらいを一言で表すと、問題解決の一連の流れを習得することです。問題を発見し、その解決に向けた道筋を検討して、情報の収集や分析を行い、解決のために必要な情報を表現し、さらなる課題を検証して改善を図るというプロセス

生徒が大学での学びや社会に出た時に生かせる資質・能力の育成を図るためには、どのような学習内容や指導が求められるのか。今号では、「情報Ⅰ」の中でも、学校・社会生活との結びつきが特に強い「情報デザイン」で求められる学びについて、Webサイトの制作ツールを提供するSTUDIO株式会社の開発者、及びベネッセの「情報Ⅰ」対応のデジタル・情報活用学習プログラム「Pスタディ」の制作担当者に話を聞いた。

そのすべてが含まれます。デザインという言葉はビジュアルを想起させますが、より広い意味として、思考のデザインと捉えるとよいでしょう。

なぜ、「情報デザイン」が重要かというと、社会で働くことは、問題解決の連続にほかならないからです。大学でも、高校以上に主体的な学びが求められ、自ら問題を解決する力が必要になるため、高校で「情報デザイン」にしっかりと取り組んでおくことは大切だと考えられています。

菊地 私は、Webサイトやアプリケーション（以下、アプリ）がユーザーにとってより使いやすい

ものとなるように、サービスとユーザーの接点を設計する「UIデザイナー」として、ビジネスの世界に身を置いています。そうした立場から見ても、「情報デザイナー」の重要性は高まる一方です。社会が多様化・複雑化し、単純なロジックでは対処できない問題が増えています。そのため、個々の問題に合わせて解決策を考え、実行するデザイン思考が相対的に重視されていると思います。

——「情報デザイン」の活動として、Webサイトの制作も例に挙げられています。それを通じた



STUDIO 株式会社  
執行役員兼 Product Growth Division  
マネージャー

菊地涼太  
きくち・りょうた

学びは、社会に出た時にどのよう  
に生かされるのでしょうか。

**白戸** Webサイトは問題解決のためのツールと位置づけられますが、ほかにもポスターやスライドなどの発信方法がありますから、必ずWebサイトの制作が求められているわけではありません。ただ、現代社会ではWebサイトは情報発信に欠かせないツールですので、学習に取り入れる意義は大きいでしょう。

**菊地** IT技術を用いて表現をすることに對して、「自分はスキルがないから」と、一歩引いてしま



ベネッセコーポレーション  
コンテンツ編集部教科編集3課  
「Pスタディ」企画リーダー

白戸大士  
しろと・たいし

う人はまだまだ少なくありません。しかし、紙で表現できることをデジタルに置き換えればよいのであって、そのハードルは未経験者が感じるほど高くありません。高校時代にWebサイトの制作を通じてデジタルで表現することに慣れておくと、進学や就職などで多様な進路の選択肢を得ることができるでしょう。

**白戸** これからは、ITのスペシャリストやWebデザイナーのみならず、あらゆる仕事においてWebサイトの制作スキルや制作過程で必要な思考法が必須になると思います。

### Webサイトを通じた 情報発信がより身近に

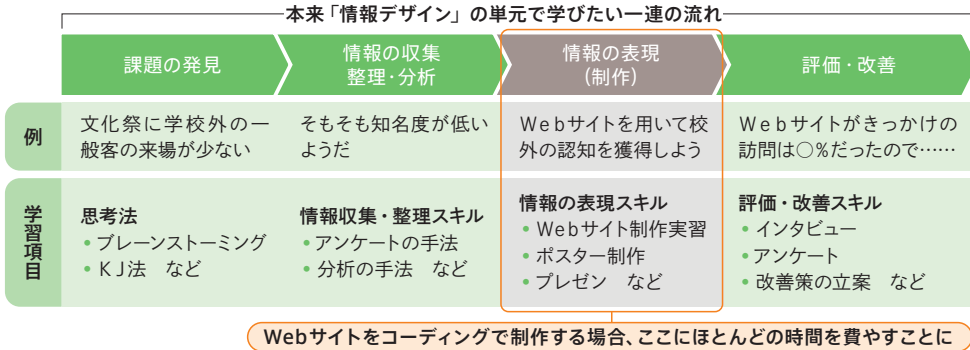
——Webサイトの制作では、CSSやHTMLといった「ソースコード」の記述が求められ、指導する教師にはプログラミング言語の知識が必要になります。そのため、情報科専任の教師がいない学校では、Webサイトの制作が困

難という現実があるようです。

**菊地** 確かにこれまででは、Webサイトの制作にはCSSやHTMLの記述が必要でしたが、近年は、そういったソースコードを使用しない、いわゆる「ノーコード」のツールが開発されています。私が所属するSTUDIO株式会社が開発した「STUDIO」もその1つで、直感的な操作で、創造性を発揮しながらWebサイトを制作することができます。ノーコードツールは、プログラミングなどのスキルを必要としないことや、作業の迅速化といった利点があり、現在、ビジネスの世界でも注目を集めています。そうしたツールを使うことで、学校現場でのWebサイトの制作も、随分身近なことになると思います。

**白戸** 私も「STUDIO」を実際に使ってみました。事前知識のない高校生でも、1、2時間あれば操作方法を習得できるほど、直感性に優れています。「STUDIO」によるWeb制作が、「情報I」の「情報デザイン」で目指

図1 「情報デザイン」の単元で学びたい一連の流れ



※ある学校の情報デザインの指導の流れを基に編集部で作成。

す問題解決力の育成につながるかと考え、ベネッセでは、22年9月より、「情報I」対応のデジタル・情報活用学習プログラム「Pスタディ」の制作実習用の教材として、

「STUDIO」を導入しました。

——Webサイトを制作するプロセスを通して、生徒にはどのような力が育まれるのかを具体的に教えてください。

**白戸** Webサイトの制作には様々な学習効果があります。広く捉えると問題解決力の育成と言えますが、そこには問題を発見したり、解決策を生み出したり、情報を適切に表現したりといった様々な力が含まれます。

**菊地** 1つつけ加えると、アウトプットする力が育まれると思います。スマートフォンが身近なツールとなった今、高校生の情報の収集力は高くなっていますが、Webサイトの制作を機に、情報のインプットだけでなく、情報のアウトプットにも積極的に取り組んでみようと考える生徒が、今後一層増えるはずです。

**白戸** 「中学生に自校の魅力を伝える」「地域の方々を文化祭に呼ぶ」「商店街の問題を解決する」といった身近なテーマでWebサイトの制作に取り組めば、生徒の

意欲は高まりやすいでしょうし、探究学習の成果を国内外に発信するWebサイトを作ってもよいでしょう。ポスターの制作などでは、絵を描くのが得意といった、特定のスキルを持つ生徒に注目が集まりがちですが、Webサイトの制作では、そうした特定のスキルを持たない生徒も、コンテンツの設計、制作の実作業、制作したサイトの閲覧者からの問い合わせ対応など、これまでにない、新たな役割で活躍できることでしょう。また、グループで分業して活動する必然性も高まるでしょう。

——ノーコードツールの活用により、Webサイトの制作を通じた学びはどう変化するのでしょうか。

**白戸** 情報の授業にWebサイトの制作を取り入れる上で壁となっているのは、CSSやHTMLの習得の難しさです。Webサイトの制作を取り入れている学校でも、CSSやHTMLを丁寧に教えたけれども、肝心の問題解決に十分な時間を割けなかったといったケースもあるようです(図1)。

しかし、ノーコードツールを使用すれば、CSSやHTMLの書き方の学習に時間を取られずに、問題解決のプロセスをじっくりと経験することができそうです。

**菊地** 経済産業省の「IT人材需給に関する調査」では、2030年にはIT人材が45万人不足すると言われていますから、プログラミングの学習も大切だと思いますし、CSSやHTMLの習得もますます重要になるでしょう。ただ、全生徒が学ぶ「情報I」の「情報デザイン」の授業では、「この問題を解決するためには、どういうサイトを作ればよいか」といったことを考えるなど、より上流のプロセスに重点を置いてもよいのではないかと思います。

**白戸** Webサイトやアプリといった世の中の便利なものが、どのような仕組みで動いているのかを理解し、さらに新しい仕組みを創り出すためには、CSSやHTMLがどのように動いているのかわかる必要があります。しかし、生徒に問題解決のプロセスをバランスよく経験させたいと考えるの

## 「Pスタディ」で提供する「STUDIO」教師用ガイド

### 4コマ目. Webサイトを評価・改善しよう

Webサイトの良い点、悪い点を評価し、さらなる改善を考えられるようになる

**10分**

**Webサイトの改善点を考える**

ワークシートを配布する

制作したWebサイトが自身の学校のWebサイトとして、「評価を受ける中学館の授業に活用される」という観点でWebサイトの改善点を考える

**35分**

**Webサイトを改善する**

まとめた改善案に合わせてWebサイトを改善していく

### 5コマ目. Webサイトを評価・改善しよう

Webサイトの良い点、悪い点を評価し、さらなる改善を考えられるようになる

**10分**

**Webサイトを改善する（前時の続き）**

前時で終わらなかった場合は作業の続きを行う

**35分**

**改善したWebサイトを発表する**

ワークシートを配布する

課題と改善案、完成したWebサイトについて発表し、相互評価をする

評価のポイントがワークシートに沿って行う

評価を受けて修正の方向性で考えられると良い

改善作業に時間がなかった場合は、発表の時間が十分でない場合は、注目すべき制作をした1人（グループ）を呼び上げるなどでも良い

**制作したWebサイトを改善する**

時間が余る、もしくは、もう1コマ時間を使えるようなら、評価に基づいた改善まで実施すると良い

時間が取れない場合は、改善の方向性を文面でまとめる方法もある

「情報デザイン」の単元では、問題解決に向け、課題発見から情報収集、整理・分析、表現、評価・改善までを学ぶことが求められる。Webサイトの制作は、問題解決の一連の流れを生徒が体験できる、格好の活動の一つと言える。「Pスタディ」では、「STUDIO」を活用した「情報デザイン」の一連の学びの中で、Webサイトの課題の発見から、実際にWebサイトを制作し、評価を行うまでの教師用ガイド（上）と生徒用ワークシートを用意している。そのため、問題解決に向けた一連の学びを、授業準備の負担なく実現することができる。

であれば、「情報デザイン」の学習においてノーコードツールを活用するのも1つの方法でしょう。生徒にどんな力を身につけさせたのかによって、授業をデザインすることが大切だと思います。

「情報デザイン」の学びを通じて、人生の礎を築く——「情報デザイン」の学びにおいて、教師はどのような役割を果たすのでしょうか。


**白戸** 生徒の思考を整理する役割を果たすことだと思います。Webサイトであれば、制作を進めるうちに、見栄えばかりを追究するなど、生徒がターゲットやそもそも制作の目的を見失ってしまうことがあります。そういった時に、軌道修正の必要性に気づかせるような教師の声かけが重要になるのではないのでしょうか。

**菊地** 最近では、起業を考える高校生も少なくありませんが、ITの知識があれば、発想やできることが大きく広がります。「情報I」での学びを含め、高校時代の様々な経験は、人生に影響を及ぼし続けます。生徒が「情報デザイン」での学びを振り返る時に、「あの時の学びが人生の礎になった」と思ってもらいたいですし、そのためのツールを提供できるのなら、とてもうれしいです。

**白戸** 一人ひとりの生徒が、「情報デザイン」での学びを通じて、多様な問題の解決に生かせる力を獲得し、よりよい人生を実現してくれることを願っています。

本誌でご紹介した「情報I」対応のデジタル・情報活用学習プログラム「Pスタディ」の詳細をご紹介します

<https://www.p-pras.com/study> または



過去に掲載した情報のセミナーのアーカイブ動画・資料は、『ハイスクールオンライン』にて公開しています

「ハイスクールオンライン」トップページ > 新課程 > 教科「情報」からアクセス

[https://bhs0.benesse.ne.jp/hs\\_online/sidou/shinkatei/joho/index.html](https://bhs0.benesse.ne.jp/hs_online/sidou/shinkatei/joho/index.html)



学年団を訪ねて

# 担任が動きやすい環境づくりで、 個性豊かな6学科をつなぐ

富山県立富山工業高校 2 学年団



## 学年団が直面した 課題

- ◎広い視野で進路を選択させるための1・2年次の進路指導の充実と、希望進路実現に必要な基礎学力の向上を実現する取り組みの具体化が求められた。
- ◎各学科の教育方針を尊重しながら、学年団としての目標を達成することを目指した。

## 学校概要

「進取敢行・自他敬愛」を校訓に掲げる。6学科8クラスを擁する県内最大の県立高校。1916年の富山市立工業学校の開校から、2016年の創立100周年を経て、日本海側屈指のものづくり県を支える有為な人材を送り出している。部活動も盛んで、体育系17、文化系7、工学系6の全30の部が活動。ソフトテニス部や放送部、吹奏楽部、電子機械工学部を始め、多くの部が県大会、全国大会で輝かしい成績を残している。



**設立** 1916(大正5)年

**形態** 全日制・定時制/機械工学科、電子機械工学科、金属工学科、電気工学科、建築工学科、土木工学科/共学

**生徒数** 1学年約320人

**2021年度進路実績(現役のみ)** 国公立大は、富山大、長岡造形大、富山県立大などに7人が合格。私立大は、千葉工業大、東海大、金沢工業大などに延べ45人が合格。短大・専門学校などに進学40人。就職216人。

## 6学科の独自性を尊重しながら、 学年団としての方向性を打ち出す

2021年4月、富山県立富山工業高校1学年主任の高橋一誠先生は、入学式で1年生とその保護者にこう語りかけた。

「3年後、320人の生徒全員に、この学校に来てよかったと言ってもらえるように、様々な取り組みに挑戦していきます」

高橋先生が学年の重点課題に定めたのが、自分の適性に合った進路を幅広い視野で選択する力を育成することと、定期考査対策を軸にした基礎学力の向上だった。

「全国に目を向けて進学先や就職先を選ぶことができるよう、1・2年次の進路指導を学年団でも充実させたいと考えました。また、希望進路を実現するためには、どんな進路であっても基礎学力は欠かせません。目標を意識させながら基礎学力を養うような取り組みも、学年団で模索したいと考えました」

高橋先生が掲げる方針を学年会議で聞いた機械工学科担任の和田雄也先生は、学年を一丸にしたいという思いを感じ取ったという。

「本校の6学科には、確固たる教育方針があります。学年団としての教育方針も重要です。様々な希望進路や学力を持つ生徒が320人もいるからこそ、学年団の教師が目

線を合わせる必要があります。そのため、高橋先生の思いと重点課題は、学年団の教師全員が理解したと思います」

初めて担任を務めることになった富居拓海先生は、「高橋先生の明確な発信によって、自分の中から不安が消えた」と振り返る。

「最初の学年集会でも、高橋先生は生徒に対して、重点課題に取り組み意気込みを話していました。生徒と一緒に話を聞きながら、担任としてするべきことが明確になったと感じました。『自分も高橋先生と同じ気持ちで、生徒に寄り添ってほしい』と思いました」

## 学年団でのコミュニケーションを 大切にし、共通理解を深める

学年主任として高橋先生が心がけたのは、学年の主役である担任への支援だ。

「生徒と密に接する担任のやりがい、苦勞は、私も十分理解しています。だからこそ、担任の先生に常に敬意を払い、先生方が動きやすいよう、風通しをよくしたいと思いました。あるクラスで何かトラブルがあった時も、まずは学年団で共有し、そのトラブルを学年団の財産と考えるようにしました。そのように、乗り越えたトラブルは次のチャンスの礎だと考える学年団であれば、先生方はさらに



## リーダーに聞く！ 5つのQ&A

**Q** どのようなチームを目指しましたか？

**A** 担任が主役の、風通しのよい学年団です。担任が動きやすければ、おのずとチームはまとまると考えました。

**Q** リーダーとして心がけていることは？

**A** 担任の取り組みを尊重することを何よりも心がけています。生徒一人ひとりの進路を支援する苦勞は、本当に大きなものです。「ありがとう」が伝わります」という気持ちを言葉にしてしっかりと伝えなければいけないと思っています。

**Q** 学年団としての「成功」は？

**A** 毎日楽しい雰囲気の仕事をしていることです。一人ひとりが楽しく専門性を発揮すれば、1足す1が3にも4にもなるはずです。

**Q** リーダーとして自覚する長所は何ですか？

**A** やり遂げたいという思いを貫くことです。冗談好きの明るい性格も、長所と言えるかもしれません。

**Q** リーダーとして自覚する短所は何ですか？

**A** 担任が困っているところを見ると、何とかしなければと熱くなり過ぎることがあります。そんな時は、学年団の先生方のアドバイスで冷静になることができます。

動きやすくなると考えました」

高橋先生は、毎日の職員朝礼後に学年団のミーティングを実施し、意思疎通がスムーズになるよう努めた。初めて大規模校で勤務する電気工学科担任の鳥越明子先生は、その取り組みによって安心感を得たと語る。

『今日、生徒がこんなことを言っていたよ』などと、情報共有が頻繁に行われていますし、『以前、こんな生徒がいたけど、こんな風に成長していった』などと、ベテランの先生方が過去の事例をよく話してくれます。他の先生方の話を聞くことは安心につながり、心に余裕を持って生徒に接することができています。私も、生徒との間であったことは隠さず、学年団に共有しようと思っています」

基礎学力の向上のために、学年団は成績不振者向けの放課後学習会や、「マナトレ（＊1）」を活用した朝学習を実施しているが、そうした施策にクラス間での温度差なく取り組んでいるのも、学年団で意思疎通ができている証だ。電子機械工学科担任の東良典先生は次のように話す。

「勉強に自信があり、学び直しに気持ちが向かわない生徒には、『基礎は念入りに固めた方がよい』『自分のペースで学習し、時間が余れば資格試験の勉強をしよう』などと、高橋先生と2人で声をかけています。担任以外の教師からも声をかけられたことで、朝学

習の重要性を、生徒は理解してくれました」

学年団で足並みをそろえながら、それぞれのクラスの工夫も進んでいる。金属工学科担任の喜中忍先生は、朝学習の開始時間をほかのクラスよりも5分早く設定している。

「朝学習の機会を利用して、『5分前行動』を習慣化させようと思いました。毎朝5分前行動を心がけさせることで、生徒はほかの場面でも時間を意識できるようになりました」

### 「もつ一つ上」を目指す経験を 生徒に積ませるために

生徒が自分の適性に合った進路を幅広い視野で選択することができるようになるために、学年団が重視するのが面談だ。建築工学科の太田明博先生は、「1・2年次に自己理解を促すことが大切」と語る。

「専門高校であっても、中学生の時に漠然と進路を選択した生徒は少なくありませんから、生徒の今後の進路選択を支援するために、一人ひとりがどんな興味・関心を持っているかを把握することが不可欠です。そこで、22年度から導入している『進路達成プログラム』（＊2）の診断結果を基に、面談を行っています。加えて、所属する専門科の学問をもっと好きになってもらうことも重要です。私のクラスであれば、設計やデザインのコ



2学年団では、富山工業高校の6学科それぞれの確固たる教育方針を尊重しつつ、学年団としての教育方針を軸に、足並みをそろえた指導も展開している。基礎学力向上のための朝学習にも、学年団が丸となって温度差なく取り組んでいる（写真）。

テストへの出場を勧めるなど、建築のやりがいや面白さに触れる機会を与えて、生徒が進路目標を持てるよう、支援しています」

電気工学科の島竹克大先生は、「生徒と新しい体験をともに楽しむことで、進路意識を醸成したい」と語る。

「23年度に、知的財産権の出願や権利に関する授業に挑戦してみたいと、管理職や学年主任に相談しています。知的財産は、科を超えていろいろな先生がかかわることができるようになるので、生徒の学びを広げるきっかけにもなるはずです。6学科をつなぐような取り組みに挑戦してみたいと思うようになったの

\* 1 ベネッセのアセスメント「進路マップ」の1つで、義務教育範囲の学び直し専用プリント教材。

\* 2 「自分の軸を持った進路選択」を体験させるベネッセの新コンセプト進路学習教材。



## 学年団を訪ねて



**2学年担任**  
**和田雄也** わだ・ゆうや  
教職歴18年。同校に赴任して8年目。  
機械工学科。



**2学年担任**  
**太田明博** おおた・あきひろ  
教職歴18年。同校に赴任して5年目。  
建築工学科。



**2学年副主任**  
**飯島貴英** いいじま・たかひで  
教職歴28年。同校に赴任して9年目。  
国語科。



**2学年主任**  
**高橋一誠** たかはし・かずまさ  
教職歴14年。同校に赴任して11年目。  
土木工学科。



**2学年担任**  
**富居拓海** ふごう・たくみ  
教職歴3年。同校に赴任して2年目。  
機械工学科。



**2学年担任**  
**島竹克大** しまたけ・かつひろ  
教職歴6年。同校に赴任して2年目。  
電気工学科。



**2学年担任**  
**喜中忍** きなか・しのぶ  
教職歴15年。同校に赴任して8年目。  
数学科。



**2学年担任**  
**東良典** あずま・よしのり  
教職歴17年。同校に赴任して1年目。  
電子機械工学科。

は、この学年団の風通しのよさのおかげです」  
3学期を迎える2学年団を、「一丸となつて問題解決に取り組む集団になっている」と、2学年副主任の飯島貴英先生は話す。  
「経験年数も在籍年数も多様な教師から成る学年団ですが、全員が互いを尊重しながら、時に悩みを打ち明けたり、愚痴をこぼしたりしながら、日々生徒に向き合っています。朝学習を始めとする様々な取り組みでクラス間格差がないこと、そして忙しい中でも、『年1回の進路ガイダンスを2回にしよう』と

いった前向きな提案が担任から上がることなど、各担任が力を発揮しやすいこの学年団だからできていることは少なくありません」  
学年主任として残り1年余り、高橋先生は「生徒にもう1つ上の目標を持たせられる学年団を目指す」と展望を語る。  
「1つ上を目指そうと決意し、行動する中でこそ、自分の道を切り開く力が生徒に育まれます。生徒に高い志を抱かせるためには、『自分はどうなりたい』という意志を生徒から引き出すことが重要です。しかし、先生方

は、朝、昼休み、放課後と、フルに時間を使って生徒と向き合っており、これ以上負担はかけられません。では、どうするか……。その難問に向き合っていくことが私の仕事です」  
難問の答えはまだ見つかってはいないが、担任が力を発揮できる学年団なら乗り越えていけると高橋先生は考えている。  
「学年主任よりも担任をやりたいと悩んだ時期もありましたが、今は、学年主任は担任の思いをくみ取り、担任に活躍してもらいための、やりがいのある仕事だと分かりました。担任の先生方の力を借りれば、きっとよい取り組みにたどり着けると思っています」

### \* 学年団 輝きのポイント \*

- \* 学年の主役は担任という考えの下、担任を学年団で支えるとともに、担任の新たな挑戦も尊重。
- \* 学年団でのコミュニケーションを大切にすることで、教師間の意思疎通をスムーズなものとし、風通しのよい関係を構築した。

# インターネット利用に関するトラブル

解説者



日本女子大学  
教職教育開発センター  
教授 坂田 仰

大阪府の公立高校に勤務後、東  
京大学大学院法学政治学研究所  
公法専攻博士課程単位取得退  
学。1996年、日本女子大学に  
赴任。専門は、憲法学、公教育  
制度論。2021年9月に『新訂  
第4版 図解・表解教育法規』（共  
著、教育開発研究所）を出版。

学校で起こり得る危機に対し、どのような備えをしておくべきか。事故や災害などが発生したり、被害を最小限にとどめるためにどう対応すればよいのか。学校の危機管理について研究する坂田仰教授が解説する本コーナー。第11回は、インターネット利用に関するトラブルについて解説する。

### 学校や教育委員会が、携帯電話等の取り扱いの基本方針を定める

内閣府が実施した「令和3年度 青少年のインターネット利用環境実態調査」の結果によると、インターネット（以下、ネット）を利用している高校生は、99・2%とほぼ全員で、利用機器は、スマートフォンが98・5%と圧倒的に多いことが分かりました。高校生にとって、スマートフォンでのネット利用は日常的事務になっていきます。

そうした状況に対し、2020年7月、文部科学省は、「学校における携帯電話の取扱い等について（通知）」を出し、学校や教育委員会の携帯電話に関する取り組みの基本事項を示しました。そして、学校における情報

モラル教育の充実や、ネットいじめ等に関する取り組みの徹底、保護者に携帯電話の利用に関する啓発活動を行うことも示し、それらを推進するため、学校や教育委員会が、学校における携帯電話等の取り扱いに関する基本方針を定め、生徒及び保護者に周知するように求めました。公立学校では教育委員会が示した基本方針にのっとり、私立学校では学校ごとに基本方針を策定し、指導されていると思えます。

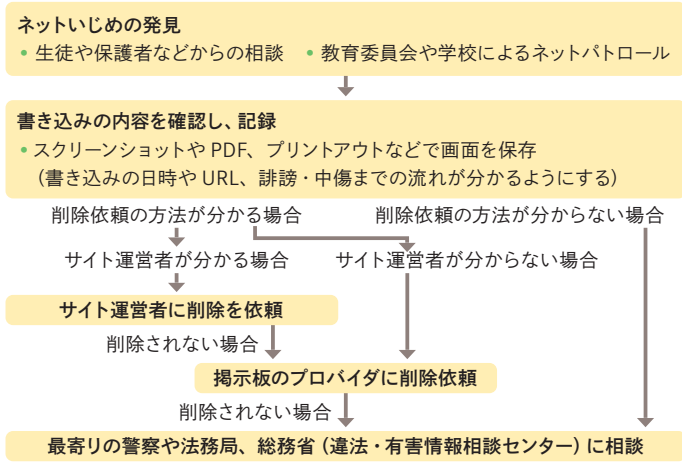
### 学校が不適切な書き込みの削除方法を把握し、生徒や保護者にも周知しておく

ネット利用に関して重大事故が起りやすいのは、ネットいじめです。主にSNS上

## インターネット利用でのトラブルを防ぐ

- ✓ 生徒への情報モラルやネットリテラシーの教育を充実させる。
- ✓ ネット上の誹謗・中傷等の書き込みを削除依頼する方法や、相談窓口の情報を、生徒や保護者に周知する。
- ✓ 学校が配備する端末には、フィルタリング機能をつける。
- ✓ 保護者が子どもへの教育の責任を果たせるよう、インターネットの利用等に関する必要な知識を啓発する。

**図 インターネット上の誹謗・中傷等の書き込みを削除する流れ**



被害者等から協力を求められた法務局等は、インターネット上の書き込みによる人権侵害について、被害者等にプロバイダ等への削除依頼等の具体的な方法を助言し、また、プロバイダ等に当該情報の削除を要請する。ただ、海外のプロバイダを経由して拡散した場合、情報の削除依頼には多額の費用が必要となり、時間もかかる。 ※坂田教授の提供資料と取材、総務省「インターネットトラブル事例集(2022年版)」を基に編集部で作成。

で、特定の生徒についての誹謗・中傷や個人情報を書き込んだり、本人になりすまして投稿する嫌がらせをしたりすることが該当します。文部科学省の21年度の調査では、高校でのネットいじめの件数は2454件で、いじめ全体の約17%でした(\*1)。匿名で書き込めるといふネットの特性上、生徒がいじめの被害者にも加害者にもなりやすく、被害が短期間で深刻化しやすいのが特徴です。書き込みが多数のサイトに拡散してしまう

と、完全に削除するのが難しくなり、いつまでもネット上に残ることも問題になります。書き込みは、第三者が閲覧できない場で行われやすいので、実態を把握して効果的な対策を講じるのが難しいのが現状ですが、被害を最小限に食い止めるため、教育委員会や学校がネットパトロールを行ったことで、早期発見に成功したケースも少なくありません。非公開の場合での書き込みを発見することは難しくても、ネット上の行動を見守っていると

周知することで、一定の抑止効果が期待できるといえます。ネット上の誹謗・中傷や個人情報などは、サイト内に設置された違反報告のフォームやメールなどを通じて、サイト運営者に削除を依頼できます。また、被害者とその保護者は、書き込みの削除などの必要な措置を講ずるにあたり、法務局等に協力を求めることができます(図)。生徒や保護者に関係機関の取り組みを周知しておき、被害に遭った際に速やかに対処できるようにしておきましょう。

現在、生徒1人につき1台の端末の配備が進められています。学校が配備した端末は、家庭で使用する場合でも、学校の管理下にあると言えます。トラブル防止のため、端末にフィルタリング機能をつけておく必要があります。

**情報モラルとネットリテラシーの教育がますます重要に**

ネットいじめの予防策としては、情報モラルとネットリテラシーの教育が最も重要だと考えます。生徒にとっては、マルチ商法による被害やフィッシング詐欺など、ネットに関する様々なトラブルを防ぐために必要な知識を身につけることができ、成年年齢が18歳になったことで、その重要度はますます高まっています。未成年であれば可能な契約の取り消しは、18歳になるとできなくなるので、生徒は自分で正しく判断し、自分の身を守らなければなりません。

保護者へのスマートフォンやネット利用に関する啓発活動も、充実させていきましょう。スマートフォンは個人の所有物であり、子どもの教育について第一義的責任を有している保護者の管理下にあるものです。例えば、スマートフォンのフィルタリング機能は、18歳未満の使用では義務化されています(\*2)。しかし、高校生の利用率は、約3割にとどまっているのが現状です(\*3)。スマートフォン等の利用について家庭で話し合うなど、保護者が責任を果たせるよう支援することも、学校に求められているのです。

\*1 「令和3年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」(2022年10月)による。ネットいじめは、「パソコンや携帯電話等で、ひぼう・中傷や嫌なことをされる」の件数。 \*2 2018年、18歳未満の青少年がスマートフォンの契約・機種変更をする際に、携帯電話事業者がフィルタリングの設定をすることが義務化された。 \*3 「我が国における青少年のインターネット利用に係るフィルタリングに関する調査」(2021年4月)による。

生徒の学びや進路選択、その後の人生に影響を与えるような革新的な技術や価値観を「社会のトレンド」として解説します。

# シェアリング・エコノミー

## モノの所有にこだわらない、「モノ離れ」など、価値観が変化

インターネットを介して見知らぬ個人同士がつながり、部屋や自動車などをシェアするサービスが広がりつつあります。それらのサービスは、「シェアリング・エコノミー」と総称され、大きく分けて「空間」「移動」「お金」「スキル」「モノ」の5つの領域があります(図)。

日本のシェアリング・エコノミーの市場規模は、2021年度は2兆4,198億円を超えたと推計され、30年度には14兆2,799億円まで拡大すると予測されています(\*1)。

シェアリング・エコノミーの急速な拡大の背景には、様々な要因があります。まず、経済不況やコロナ禍などの影響により、生活や収入、雇用に対する不安が高まり、人々の「モノ離れ」が進行していることが挙げられるでしょう。また、お金の節約だけが目的ではなく、消費に対する価値観が変化しているという一面もあります。若い世代を中心に、モノを購入して所有することにこだわらず、シェアされているモノを活用すればよいという価値観が浸透しつつあります。実際、シェアリング・エコノミーの利用により、節約しながらいろいろなモノを試すことができたり、次々と製品を買い替える罪悪感から解放されたりすることで、身軽になり、生活の質が改善されると感じている人が多いようです。

副業・兼業が促進されていることも、シェアリング・エコノミーが活性化している要因の1つでしょう。また、国や自治体がSDGs(\*2)を重視する方針を示していることも、人々の消費行動を変化させていると考えられます。シェアリング・

図 シェアリング・エコノミー 5つの領域

空間	部屋(民泊)、駐車場、倉庫など
移動	自動車、自転車など
お金	クラウドファンディングなど
スキル	自分が持つ知識、技術、ノウハウなど
モノ	本、服、家具などの一般消費財

※高橋教授への取材を基に編集部で作成。

### 解説者



同志社大学 商学部 教授

**高橋 広行** たかはし ひろゆき

専門はマーケティング。消費者行動やブランド論など、幅広い領域で、企業との共同研究やアドバイザーとしての活動を展開。著書に、『「持たない時代」のマーケティング』(共著、同文館出版)など。

エコノミーの利用者は、環境問題への意識が高いといった調査結果もありますので、社会全体での環境意識の高まりに伴い、今後も利用が拡大されると予測することができます。

さらに、インターネットを始めとしたデジタル技術も、シェアリング・エコノミーの拡大に欠かせない要因です。インターネット上のプラットフォームで、貸し手と借り手を結びつけ、利用料金の決済も容易になり、大小様々なサービスが展開されるようになりました。シェアリング・エコノミーを提供する事業者は、利用者をマッチングするプラットフォームさえ開発すればよく、製品の在庫を持つ必要もないため、事業参加が比較的容易といった側面があります。

## 多様な消費のあり方から、自分らしい生活を実現

シェアリング・エコノミーが広がると、「モノが売れなくなるのでは?」という疑問を持つかもしれません。確かにそうした一面はあり、企業は様々な対応策に取り組んでいます。例えば、毎月定額で商品を提供する「サブスクリプション・サービス」など、人々がモノを所有しない時代の販売戦略を立てています。ただ、モノを販売する場合と比べると、消費者一人ひとりが1回に支払う金額は減るため、企業は、サービスの満足度を重視し、より多くの消費者と長くつき合っていくビジネスモデルに転換する動きが見られています。

現在のシェアリング・エコノミーには、個人間のトラブルをどう防ぐかといった課題がありますし、面識のない個人との間で貸し借りをすることに、不安を感じる人も少なくないでしょう。そうした課題に対しては、貸し手と借り手が互いに評価をし合った履歴を公表することで、その人に対する信頼性を示す仕組みが導入されているケースが多く見られます。つまり、「よい人」でないと、市場に参加しづらくなるのです。そのため、利用者の質がおのずと高まることが期待できます。さらに、今後の技術の進化や法整備の進展に伴って普及が一層進み、より多様な消費のあり方から、自分らしい生活を実現しやすくなると考えられています。

VIEWnext ONLINEでは、トレンド・ワードについて、誌面でお伝えし切れなかった内容を「学ぶ・働く・暮らす」の切り口で解説しています。右記の2次元コードからアクセスし、ご覧ください。



\*1 一般社団法人シェアリングエコノミー協会と株式会社情報通信総合研究所による共同調査。

\*2 Sustainable Development Goalsの略。2015年に国連が掲げた、持続可能な開発目標のこと。「貧困をなくそう」「飢餓をゼロに」など、17の目標と169のターゲットから成る。

# For Teacher Section

教師個々の教科指導・進路指導に  
役立つ事例や情報を、  
先生方の思いを乗せてお届けする

P.40

お勧めの分掌 ▶

教務担当

担任

発問・課題設定をキーに見る

主体的・  
対話的で  
深い学び

授業実践

教科の見方・考え方を働かせる  
問いや課題を通じて学びが深まる授業に迫る

英語 愛知県立豊田南高校 中島浩平

P.40

オンラインで世界と教室をつなぎ、  
英語技能の向上と多様性の理解を目指す

体育 鹿児島県・私立鹿児島修学館中学校・高校 白川達也 P.44

生徒が授業者となり、授業を計画・実施。  
その過程で問題解決のプロセスを学ぶ

P.48

お勧めの分掌 ▶

進路担当

学年団

担任

マイ・ストーリーを語る  
生徒を育む進路指導

これまでの自分と将来の自分を、  
大学での学びと結びつけて語る生徒を育む

1・2年次 「マイ・ストーリー」の軸づくり  
東京都・私立桜丘中学・高校

やりたいことを見いだせるよう、  
選択の場を設け、自分の内面と向き合わせる

P.50

お勧めの分掌 ▶

進路担当

学年団

担任

変化の激しい社会に飛び込む生徒に伴走  
クローズアップ! 就職指導

社会や企業が変化する中、  
就職活動を頑張る生徒をどう支援するか

自立に向けた自己理解の促進  
1・2年次

傾聴を通して、生徒の自己理解を支援  
宮城県・石巻市立桜坂高校

P.52

お勧めの分掌 ▶

学年団



新課程初年度でも迷わない! 各月の指導のポイントをリストアップ

1月2月のポイント

生徒を多面的に捉えて総括し、  
第2学年に向けて準備する

主体的・  
対話的で  
深い学び

授業実践

# 英語

オンラインで世界と教室をつなぎ、

英語技能の向上と多様性の理解を目指す

愛知県立豊田南高校 中島浩平

## 14:15 打ち合わせ・事前準備



授業前、中島先生は、プレゼンに参加する海外の高校の教師と打ち合わせを実施。今回は、フィリピン・インド・アルメニアから100人以上の高校生が参加。豊田南高校の生徒は、コロナ対策のため、視聴覚室、図書室などに分散し、プレゼンの準備を行うなど、授業に備えた。

### 本時の概要

【対象／教科／科目】3年生／英語／コミュニケーション英語Ⅲ 【分野・単元】Lesson 7 Why is Dishonesty So Interesting? (全6時間のうちの6時間目。P.43に単元の指導計画を掲載)  
 【育成を目指す資質・能力】「コラボレーション・知識の構築」等、21CLD（\*1）の6つの資質・能力すべて 【学習内容】「なぜ人は嘘をつくのか」という教科書の素材文のテーマを基に、自分が経験した「罪のない嘘」「大きな嘘」などについて、海外の高校生とオンライン会議ツールを使ってプレゼンテーションなどを行い合い、国や文化は違っても、人間の心理は同じであることを理解する。

### 本時のキー課題

## 14:55 「嘘」についてのプレゼン



主 対 深

単元の3時間目までに作成していた資料を使ってプレゼン。生徒たちは、自身の「嘘」についての経験を説明した。相手が話す単語の意味が分からず、慌てて電子辞書で調べたり、別の表現で説明してほしいことを伝えたりして、懸命にコミュニケーションを取った。

主 主体的な学び  
対 対話的な学び  
深 深い学び

**なかしま・こうへい** 教職歴12年。同校に赴任して6年目。英語科。マイクロソフト認定教育イノベーター。2019年にフルブライトICT日米教員交流プログラムでデジタル教材の活用法を習得。その知見を生かし、ICTの活用とPBL（\*2）を取り入れた授業を展開している。現在は米国大学院にてM.Ed (Master of Education 教育学修士)を取得中。

### 学校概要

◎「全力」を校訓、「たくましく生きる青年 たゆみなく学ぶ青年 心を大切にできる青年」を教育目標とする。ICT環境を完備したアクティブ・ラーニングルームを新設するなど、生徒の主体的な学びの促進を目指している。

◎設立 1980（昭和55）年

◎形態 全日制／普通科／共学

◎生徒数 1学年約360人

◎2022年度入試合格実績（現浪計） 国公立大は、東京外国語大、名古屋大、大阪大、神戸大、愛知県立大、名古屋市立大などに104人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西学院大などに延べ1,295人が合格。



\*1 21世紀型スキルを育成する授業デザイン。Microsoftが出資するITResearchが提供する教育プログラム。「コラボレーション・知識の構築・自律的な学習・現実社会の課題解決と革新的な取り組み・熟達したコミュニケーション・学習のためのICT活用」の6つの能力を育成するための教育手法・評価方法を学ぶ。  
 \*2 Problem Based Learning、あるいはProject Based Learningの略。

## 14:43 自己紹介

主  
対  
深

オンラインセッションの各グループは、同校の生徒2人、2か国の高校生2人の計4人で構成。密を避けるため、同校の生徒は、基本的に1人1台のパソコンを使用。自己紹介に続いて、本時の課題である自分たちが経験した「罪のない嘘」「大きな嘘」などについて、プレゼンを始めた。

## 14:30 ネチケットの説明・オープニングスピーチ



セッション中のエチケット（ネチケット）を、中島先生が英語で説明。続いて、同校の代表の生徒が、英語でオープニングスピーチを行った。「交流を楽しみましょう」と呼びかけ、4人1組のグループで、オンラインセッションを開始した。

## 15:15 クロージングスピーチ

主  
対  
深

プレゼンが終わったグループは、余った時間でフリートーク。好きなスポーツや趣味、将来の夢など、あらかじめ用意した質問をベースに、自由に会話を展開した。生徒たちはまだまだ話し足りない様子を見せる中、最後に同校の生徒がクロージングスピーチを行い、セッションが終了した。

## 15:05 活動状況の巡視

主  
対  
深

セッション中、中島先生は各グループを巡回し、進捗を確認。海外の高校の教師から、会話が停滞しているグループがあるという情報が入ると、そのグループのセッションに入り、「何を話していたの？」などと、会話をつないだ。プレゼンを活性化させるのも、ファシリテーターである中島先生の役割だ。

● 私が目指す授業

**生徒とともに世界を旅し、  
現実社会とつながる授業**

英語の教師を志した時から、生徒と一緒に世界中を旅するような授業を通じて、現実社会を生き抜くために必要な資質・能力を生徒に育成したいと思っていました。その背景には、教師になる前の、カナダで働いていた経験があります。ネイティブの英語についていけず、辞書を片手にやり取りする中で、顧客からクレームや励ましの言葉をもらい、英語のスキルを高めていきました。その経験から、実践的なコミュニケーション能力を身につけるためには、生徒が必死で考えて、英語を使って主体的に対応しなければならぬ環境を用意する必要があると考えました。

これまで、海外の生徒とオンラインで交流し、互いの国を紹介する活動などを年間数回取り入れてきましたが、もっと普段から生徒を世界中の人たちとつなげたい、他校の生徒も含め、広く日本の英語教育を底上げしたいという思いから、2020年、世界中の教師や高校生が誰でも交流できる Global Classroom

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

学年団

担任

Community (GCC) という学習コミュニティサイトを立ち上げました。以来、GCCを使って200回以上、海外の生徒とのセッションを行ってきました。

授業力やファシリテートの技術を高める上では、21CLDというプログラムが役立つています。それは、21世紀型スキルを育成するための授業デザインを学ぶもので、21CLDが育成を目指す6つの資質・能力を意識して授業をデザインすることを心がけています。

●私の発問・課題設定の観点

切迫した状況を経験する中で、実践的な英語力を身につける

私の授業では、おおむね1か月に1回、GCCを使って、海外の高校生と単元のテーマについて語り合う機会を設けています。今回の単元の最後にも、「なぜ人は嘘をつくのか」という教科書の素材文のテーマを踏まえて、「自分がついた罪のない嘘」「一番大きな嘘」「大切な人に嘘をつかれた経験」などについて、海外の高校生とプレゼンし合うセッションを行いました。

単元は、単に教科書をなぞるだけ

ではなく、最後のセッションを見据えて構成しました。1時間目は、自分がついた嘘について振り返るエッセー・ライティングを実施し、2・3時間目は、人間が嘘をつく際の心理状態について、教科書の素材文を読解することで、理解を深めました。4時間目は、セッションに向けた準備として、発表で使用するプレゼン資料をパワーポイントで作成。5時間目は、セッションに参加する海外の生徒と一緒に、心理学を専攻するグローバル・エデュケーターの英語による講演（嘘の種類や嘘をついた時の身体反応などの話）をオンラインで聞き、セッションに臨みました。

セッションには、フィリピン・インド・アルメニアから100人以上の高校生が参加してくれました。英語力の高いフィリピンやインドの高校生とのコミュニケーションは容易ではありません。会話の途中で単語の意味が分からず、慌てて電子辞書で調べる生徒もいますが、そうした切迫した状況をくぐり抜ける中で、実践的なコミュニケーション力は向上します。セッションの最後に行うフリートークがいつも盛り上がるのは、生徒たちが本気でコミュニケーションを取った証拠だと思えます。

世界の同年代とつながり、生き方を深く考える

生徒たちには、セッションでは、できるだけ自分からコミュニケーションを図るよう、アドバイスしています。海外の人たちは日本人よりもはっきりと意見を主張し、日本人は受け身になる傾向があるので、議論のペースを相手に握られがちです。セッションを通して、グローバル社会で生き抜くための力を身につけてほしいと考えています。

オンラインによる国際交流のよさは、リアルタイムで世界の同年代の生き方に触れられることです。例えば、アルメニアの生徒からは、現在行われているアゼルバイジャンとの武力衝突が、人々の生活にどのような影響を与えているのかを聞くなど、

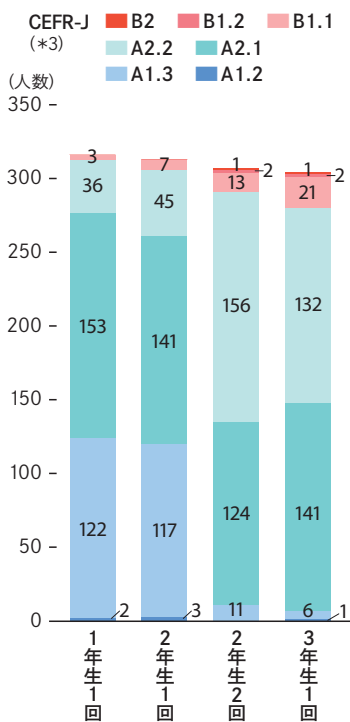
●成果と展望

良質なショックを与え、生徒の視野を広げたい

本校では近年、国際系学部への進学希望者が増えています。オンラインの交流を通じて、海外の同世代たちと切磋琢磨したいという気持ち萌芽しているのだと思います。

異なる環境で生きている同年代と触れ合うことで、現実の世界や多様性を知ることが出来ます。そこから、自分にできることは何か、自分はいかにどのように生きていくべきか、生徒は考え始めます。そのような時に、英語の授業は、単なる言語スキルの獲得だけではなく、多様性を理解し、自分のあり方を考える深い学びの場になるのだと考えています。

☑ GTECの度数分布



※学校資料を基に編集部で作成。

\* 3 CEFR-Jは、欧州共通言語参照枠 (CEFR) をベースに、日本の英語教育での利用を目的に構築された、新しい英語能力の到達度指標。CEFR のA1 は、CEFR-Jにおいて、A1.1 / A1.2 / A1.3 というように細分化されて示されている。

英語の技能についても、21年度2年次の英語4技能検定「GETEC」では、多くの生徒がスコアを伸ばしました(図)。1年次は、スピーキング以外の平均スコアは全国平均以下だったのですが、2年次には、4技能すべての平均スコアが全国平均を上回りました。

そうした成果が出ていても、オンラインセッションでは、アジアの高校生の英語力の高さを痛感します。特に、インドの生徒はICTの活用能力も高く、スマートフォンでこれだけの高いプレゼン資料を作成できるのかと驚かされます。しかし、セッションを重ねるうちに、海外の高校生の英語力やICTスキル、力強く生きている姿を、グローバル社会の現実として生徒に見せることは重要なことだと思つようになりました。

本時でも、将来の夢を明確に語る海外の高校生の話を聞いて、生徒たちはよい意味でショックを受けているように見えました。たとえそれが敗北感に近いものだとしても、日本国内だけを見ていればよい時代ではないことに気づきかけになるのであれば、そのショックには大きな意味があると思つています。

VIEWnext ONLINEでは、  
本時の授業の様子を  
ダイジェスト動画で紹介!

VIEWnext ONLINE 検索



中島先生から

英語科の先生方へのメッセージ

学習コミュニティサイト Global Classroom Community (GCC<sup>①</sup>) には、Microsoft や Google の認定エデュケーターなどの協力の下、現在、1600人以上の教師が登録しています。毎週土曜日の1時間、高校生が自由に参加できるオンラインセッションを開催しており、2022年11月には90回目を迎えました。GCCを立ち上げた理由の1つは、経済的な理由などで海外研修や留学に行けない子どもたちでも、気軽に海外とつながれる機会をつくってあげたかったことです。先生方には、生徒と一緒に冒険をするつもりでGCCを活用し、積極的に海外とつながっていただきたいと思っています。ダイジェスト動画や、英語学習のための自作コンテンツは、YouTubeで公開しています(②)。



- ① <https://www.facebook.com/groups/605559880152970>
- ② <https://www.youtube.com/@AnimationEnglish7/featured>

単元の指導計画

【教科・科目】英語・コミュニケーション英語Ⅲ 【分野・単元】Lesson 7 Why Is Dishonesty So Interesting? 【テーマ・作品】嘘をつく人間の心理状態を理解する 【設定時数】全6時間(本時は6時間目) 【単元目標】テーマに対する理解を深め、実際のLife Episodeを他国の高校生とシェアし、文化背景が違えど、人間の心理は皆同じであることを理解する。

時数	学習内容	身につけさせたい 資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価 方法
1	Life Episode Writing	Collaboration / knowledge construction / self-regulation / skilled communication 【知識、技能、思考力、表現力、協働性】	自分が今までに嘘をついた経験を思い出し、英語で書く。その際にペアになって、エピソードをシェアしながらライティングを楽しむ。	【主体的な学び】 具体的な実体験をライティングさせる。	
5	Dr. Alice Durgaryan (Psychologist) Online Webinar / Title: Why People Tell a lie?	Collaboration / knowledge construction / the use of ICT for learning / skilled communication 【知識、技能、思考力、表現力、協働性】	心理学の博士課程を修了した Global Educator による、人が嘘をつく時の心理状態についてのオンライン講義を受ける。6時間目にセッションを行う海外の高校生も講義に参加。セッション後に、講義動画を再度視聴できるように、YouTubeで公開する。	【主体的な学び】 講義を録画した動画を再度視聴するように指示し、理解を深める環境を準備する。	Self-feedback sheet
6	Online Session Pair Presentation on Zoom	Collaboration / knowledge construction / self-regulation / real-world problem solving and innovation / the use of ICT for learning / skilled communication 【知識、技能、思考力、表現力、協働性】	5時間目に学んだことを生かし、それまでに準備してきた各々のプレゼンをそれぞれチームに分かれて行う。新しい出会いに感謝し、発表することよりも、コミュニケーションを楽しむことを第一に考えて、交流する。オープニングスピーチとクロージングスピーチは本校の生徒が行う。	【主体的な学び】 出会いを楽しむ。 【対話的な学び】 相手を笑顔にさせるコミュニケーションを心がける。 【深い学び】 オンライン交流で起こりやすいトラブルを予期させ、対処方法を事前に確認させる。相手への配慮、ネチケットも怠らないようにさせる。	Self-feedback sheet

※中島先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。単元の指導計画の全6時間分は、ウェブサイト「VIEW next ONLINE」(<https://view-next.benesse.jp/>) からダウンロードできます。「TOP→学校教育情報誌『VIEW next』→高校版バックナンバー」をご覧ください。

本時のキー課題

14:20 授業者が本時の目標を説明



授業者の2人が、「様々な場面に合わせたパスの質を高めよう」と、本時の目標を発表した。攻撃の選択肢の少なさを現状の課題に挙げ、改善策として、ボールキープ時やサイド攻撃時のパス練習を行うと説明。試合前やハーフタイムに、チーム内で戦術を確認することも注意点に挙げた。

主

14:55 先生と授業者がミーティング



前半が終わると、白川先生と授業者が試合を振り返った。「サイドが使えていない」と課題を挙げた授業者に、「それを打開するためには、どうすればよい？」と白川先生。授業者は、「全体的にポジションを広げて、パスコースを確保する」という改善策を提案し、それを各チームに伝えた。

主

対

深

本時の概要

〔対象／教科／科目〕2・3年生／体育／選択球技（サッカー・バレーボール・卓球から1種目を選択）  
 〔分野・単元〕多様性を認め合う学び（全20時間のうちの12時間目。P.47に単元の指導計画を掲載）  
 〔育成を目指す資質・能力〕技能、思考力、判断力、表現力、主体性、協働性  
 〔学習内容〕「選択球技」では、2・3年生各1人が持ち回りで授業者となり、2人で相談して授業計画を立て、それに沿って授業を進める。本時のサッカーでは、授業者が本時の目標と練習の進め方を生徒に説明してから、パスを練習。試合を行い、練習通りにできたかを確認した。

主 主体的な学び  
 対 対話的な学び  
 深 深い学び

主体的・  
 対話的で  
 深い学び

授 業 実 践

生徒が授業者となり、授業を計画・実施。  
 その過程で問題解決のプロセスを学ぶ  
 鹿児島県・私立鹿児島修学館中学校・高校 白川達也

しらかわ・たつや 教職歴13年。同校に赴任して6年目。入試広報委員長。保健体育科主任。東京都の私立高校などを経て、現職。

学校概要

◎鹿児島中学校として開校。2002年度、中高一貫校となり、現校名に改称。20年度、国際バカロレア中等教育プログラム（MYP）候補校に認定され、23年度の認定校承認を目指し、改革に取り組んでいる。校訓は、「克己・礼節・飛躍」。

◎設立 1983（昭和58）年

◎形態 全日制／普通科／共学

◎生徒数 1学年約50人（高校）

◎2022年度入試合格実績（現役のみ） 国公立大は、鹿児島大などに3人が合格。私立大は、東北福祉大、国際医療福祉大、中央大、日本大、名古屋芸術大、立命館大、近畿大、梅花女子大、福山大、久留米大、筑紫女学園大、長崎国際大、崇城大、宮崎国際大、鹿児島国際大などに延べ26人が合格。



## 14:43 2チームに分かれて試合を開始

主  
対

2チームに分かれて試合を行った。チーム内で話し合い、センタリングをする役など、ポジションを決定。「練習通りに、サイドでパスを交換して攻めていこう」と、戦術を確認して試合に臨んだ。しかし、試合の前半は、ピッチ中央でのボールの奪い合いが続き、パスはなかなかつながらなかった。

## 14:25 パスとセンタリングを練習

主  
対

授業者が、手本を見せながら練習方法を説明。生徒は、手本を参考に、ヘアでパス練習を5分間行った。次に、パス→センタリング→シュートによるサイド攻撃の練習を、3人1組で5分間行った。生徒は、本時の目標である「パスの質を高める」ために、積極的に動いていた。

## 15:06 試合の振り返り

主  
対  
深

全員で試合を振り返った。授業者は、「後半に戦術を修正してから、ボールの回り方がよくなった」と総括。白川先生が、「後半は、よいシーンが増えた。全員が本時の目標を理解して練習をしていたパスが、試合で生きていた」と褒めると、生徒から拍手が起こった。

## 14:57 試合の後半を開始

主  
対

白川先生が、「前半の反省を踏まえて、ポジショニングを考えることと、コミュニケーションを取ることが大切だよ」と、生徒にアドバイス。生徒は声をかけ合い、味方の位置をよく見てポジションを広く取るようになり、サイドへのパスが出るようになった。

●私が目指す授業

競技活動を通じて、  
実生活で生きる概念を学ぶ

本校は、2023年度の国際バカロレア（以下、IB）の認定校を目指し、18年度からMYP（\*）を導入しています。その実践にあたり、IBの理念を知ったことで、私の指導観は一変しました。IBでは、すべての教育活動において、生徒が実社会で活用できる思考力や人間力などを身につけることに重点を置きます。一般的に、体育の授業は、競技技術が向上するように練習し、実技試験で技術の到達度を評価しますが、IBでは、体育の授業もIBの重点に沿って、実生活に活用できる力を育成することが求められます。

そこで私は、生徒が練習計画を立てたり、試合の作戦を練ったりと、競技を通じて探究活動を行い、時間・空間の捉え方や、コミュニケーションの大切さなどを理解できるように授業づくりを行っています。例えば、バスケットボールでは、パスがうまく回らない時に、いくつかある問題の中で、「味方が近すぎて、空間を生かしていない」ことを重要な問題

\* 国際バカロレアは、グローバル化に対応できるスキルを身につけた人材を育成するための、生徒の年齢に応じた教育プログラムで、MYPは、中学1年生～高校1年生対象のプログラムとなる。

として捉えたのであれば、「ポジションニングの修正」という解決策までを、生徒同士で考えさせます。問題解決のプロセスを、教師が示すのではなく、生徒主体で学ばせるのです。

22年度からは、2・3年生の合同授業を始めました。学校行事でリーダー役となる2・3年生の交流を促すことで、学校行事がさらに活性化するのではないかと期待しています。

●私の発問・課題設定の観点  
生徒が授業者となり、  
授業のすべてを取り仕切る

授業は、1Bで重視する資質・能力である批判的思考力や対人能力、自発性などを伸ばすため、生徒主体で行います。

「選択球技」では、生徒はまず、自分が取り組みたい種目をサッカー・バレーボール・卓球の中から選び、希望種目を聞くアンケートに答えます。次に、アンケート結果を基に生徒同士で話し合っ各々種目の人数を調整し、各自が取り組む種目を決めます。毎回の授業は、種目ごとに、2・3年生各1人が持ち回りで務める「授業者」が進めます。授業終了後、次の授業者が2人で相談して授業計

画を立て(図)、授業前に、私と一緒に見直します。授業計画では、目標を達成するための内容になっているかどうかに着目します。例えば、目標が「パスの質を高める」なのに、シュート練習ばかりなど、目標と練習内容が食い違う場合は、「この練習で目標を達成できると思う?」と問いかけることで、生徒が問題に気づき、修正できるようにしています。

授業では最初に、授業者が本時の目標と練習の進め方を説明します。その際、生徒間で目標をしっかりと共有できているかどうかを見て、共有が十分でなければ、授業者に声をかけます。また、練習の途中、目標への意識が低いように見える生徒がいる時は、授業者に「今のままでいいかな?」などと問いかけ、問題の解決策を考えさせるようにしています。本時のサッカーでは、どの生徒も最後まで目標を意識していることが見て取れました。その要因は、パスがうまく通らなかつた場合を想定して、授業計画を立てていたことにあります。練習したパスが試合の前半では通らなかつたことを受け、授業者は「全体的にポジションを広げて、パスコースを確保する」と、事前に考えていた指示をハーフタイム中に

図 本時の授業計画(抜粋)

本時の目標	様々な場面に合わせたパスの質を高めよう		実施日: 10月7日(金)
本時の計画	0	集合・準備・点呼	本時の練習①(図で説明すべきこと・留意点等)
	5	チームで体操(が中心)	① 1人1人相手が戻るとボールを投げ、(2人ペアで)相手が戻ると
	10	短い距離(2-3m)でのパス交換	② 1人1人パスを返すと、5-5m以内で対面パス
	15	サイドクロス攻撃からのシュート練習	
	20	休憩・振りかえり チーム内で戦術の検討・確認	
	25	試合(前半) ※トレーニングの成果が一瞬でもだせるように意識	
	30	休憩・戦術の見直し	
	35	試合(後半) ※トレーニングの成果が一瞬でもだせるように意識	
	45	整理運動・全体振り返り	
	50	片付け 集合・連絡・解散	
報告者: 全体の振り返り(授業目標の達成度やよかつた点・次回への改善点など)			

授業者が作成した本時の授業計画。前時の反省を踏まえて目標を決め、練習内容や時間配分などの計画を立てた。授業後には、全体を振り返り、目標の到達度や次時に向けた改善点などを記入して、白川先生に提出した。  
※学校資料を抜粋して掲載。

出しました。そのように、「コミュニケーションを取り、全員で目標を共有し直したことが、後半のよいパス回しにつながったと思います。

学習評価は、生徒の自己評価や教師の行動観察のほか、単元末に課す総括レポート(800〜1200字)で行います。レポートでは、技術力を高めるためにチームで話し合った内容や、また、パスがつながらないなどの課題に対して、どのような授業計画を立て、練習の成果をどうやって検証したのか、そして、それを日常生活や将来にどう生かせるのかといった点についてまとめさせています。

●成果と展望  
体育での学びが、他の場面で  
どう生きるのかを検証したい

前期の初めは、「スポーツを楽しんでほしい」と、自由に活動させました。生徒は試合ばかりしていたのですが、同じミスを繰り返すことに課題を感じ、次第に練習を行うようになりました。そこで私は、「その練習の目的は何?」などと声をかけ、生徒に練習の意味を考えさせるようにしました。すると生徒は、課題に基づいた授業計画を立てるようになりました。生徒に授業アンケートを取ったと



このころ、85%の生徒が「学習内容についてもっと深く学びたくなった」、94%が「級友や先生とコミュニケーションを取る事ができた」と、肯定的な回答をしており、生徒が主体的に探究し、対話を積極的にやっている姿が見て取れました。

今後は、体育の授業での学びが、他教科の授業や学校行事などにもどう生きるのかを検証したいと考えています。生徒からは「体育の授業で行ってきた、問題を複数の視点で考えることが、数学の問題を解く際に役立つ」となどの声が挙がり、手応えを感じています。例えば、学校行事で先輩後輩と活動する際に、体育の授業で学んだ、目標を共有するための声かけや周囲の動かし方、時間配分などの経験がどう生きているのかを見取りたいと思っています。

単元の指導計画

【教科・科目】体育・選択球技（サッカー・バレーボール・卓球から1種目を選択） 【分野・単元】多様性を認め合う学び 【設定時数】Ⅰ期10時間 Ⅱ期10時間 【単元目標】生徒が運動とかがかわる中で得た理論と、生成した動きの意味や効果を、言葉で他者に伝える表現力・対話力を高めること。

時数	学習内容	身につけさせたい資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>Ⅰ期オリエンテーション</li> <li>希望種目のアンケートの作成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>単元のねらいを理解し、自分が取り組みたい種目を選択できる。</li> </ul> <p>【思考力、判断力】</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>単元のねらいと、授業の進め方を説明する。</li> <li>体育委員を中心に生徒同士で話し合い、アンケートを作成して、希望の種目を調査する。</li> </ol>	<p>【主体的な学び】希望種目を聞くアンケートを作成する際、生徒一人ひとりが議論に参加できるように、スライドで趣旨を説明する。【対話的な学び】他学年の生徒と積極的に集団行動ができるよう、体育委員に議論のファシリテーターを務めさせる。</p> <p>【深い学び】異学年で学ぶ理由や、授業を活性化するための方法を、生徒に問いかける。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>希望種目を聞くアンケート</li> </ul>
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>種目の決定</li> <li>運営方法の確認</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>各種目の希望者数のバランスを見て、生徒同士で話し合って人数を調整することができる。</li> <li>全員が気持ちよく授業に取り組むためのルールを作ることができる。</li> </ul> <p>【多様性、協働性】</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>前時に取ったアンケートの結果を発表する。</li> <li>各種目の希望者数のバランスを見て、生徒同士で話し合って人数を調整し、各自の参加種目を決める。</li> <li>種目ごとに集まり、ルールを作成する。</li> </ol>	<p>【主体的な学び】各種目の人数を調整できるように、人数のバランスを考えることなどを助言する。</p> <p>【対話的な学び】各種目の人数にばらつきが出て、取り組めない種目が出ないように確認させる。全員が気持ちよく授業に取り組むためのルールを、生徒に作らせる。</p> <p>【深い学び】種目ごとの人数のバランスやルールが必要な理由を問いかける。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>種目確定に至るまでの生徒の議論の様子</li> </ul>
11	<ul style="list-style-type: none"> <li>Ⅰ期振り返り</li> <li>Ⅱ期オリエンテーション</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Ⅰ期の授業内容について、よかった点や改善点を見いだすことができる。</li> <li>Ⅱ期の学習内容のねらいについて理解することができる。</li> </ul> <p>【知識、思考力、表現力】</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>全員が集まり、Ⅰ期の各種目での活動内容について、よかった点や改善点などを話し合う。</li> <li>Ⅱ期の単元のねらいと、授業の流れを説明する。</li> </ol>	<p>【主体的な学び】「授業者の役割を果たすことができたか」「どのような力が身につくそうか」と問いかける。</p> <p>【対話的な学び】自己表現力を高めるためにはどうすればよいかを、他者との話し合いを通じて考えさせる。</p> <p>【深い学び】「授業者としてどのような学びがあったか」「自分の考えをどのように他者に伝えることができたか」と問いかける。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>個人振り返りシート</li> </ul>
12 19	<ul style="list-style-type: none"> <li>種目ごとに活動</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業者は、各自の技術力が上がるよう、目標を立て、練習内容を計画し、授業を進めることができる。</li> <li>その他の生徒は、授業者が立てた目標の達成に向けて、主体的に活動することができる。</li> </ul> <p>【技能、思考力、判断力、表現力、主体性、協働性】</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>授業者が、本時の目標と練習の進め方を説明する。</li> <li>適宜、授業者同士や授業者と教師が話し合い、練習内容を修正する。</li> <li>授業者は、授業の実施レポートを作成して、教師に提出する。</li> </ol>	<p>【主体的な学び】授業者が立てた授業計画を、他の生徒に教授できるように、補助する。</p> <p>【対話的な学び】生徒が授業者が立てた目標を、他の生徒が常に意識できるように、生徒間でコミュニケーションを取るよう、声をかける。</p> <p>【深い学び】授業計画は適切に立てられているか、目標を達成する授業内容となっているか、全員が授業目標を把握できているか、安全が確保されているかに留意する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒の取り組みの様子</li> <li>授業者の「本時の授業計画」</li> </ul>
20	<ul style="list-style-type: none"> <li>Ⅱ期振り返り</li> <li>総括レポートの作成</li> <li>全体総括</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>単元を通して各授業を振り返り、学習したことを将来や日常生活にどのように生かすことができるかをレポートにまとめることができる。</li> </ul> <p>【知識、思考力、表現力】</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>全員が集まり、各種目での活動内容について、よかった点や改善点などを話し合う。</li> <li>単元を通して学んだことや、それを将来や日常生活にどのように生かしていくかをレポートにまとめる。</li> </ol>	<p>【主体的な学び】「授業者の役割を果たすことができたか」「どのような力が身につくそうか」と問いかける。</p> <p>【対話的な学び】本単元での学びを、将来のどのような場面で生かすことができるのかについて考えさせる。</p> <p>【深い学び】「授業者としてどのような学びがあったか」「自分の考えをどのように他者に伝えることができたか」と問いかける。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>総括レポート</li> </ul>

※白川先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。単元の指導計画の全20時間分は、ウェブサイト「VIEW next ONLINE」(https://view-next.benesse.jp/) からダウンロードできます。「TOP →学校教育情報誌『VIEW next』 →高校版バックナンバー」をご覧ください。

「マイ・ストーリー」を描き、それを語れる力が、これからの大学入試で希望進路を実現するために必要とされることを検証し、そうした力を生徒に育む教師の指導や支援のあり方・方法を、実践事例を通じてお伝えしたVIEWnext高校版 2021年8月号・特集はこちら ▶



「マイ・ストーリー」とは、生徒一人ひとりの「自分のこれまでの学びや活動、その成果や結果に至るまでのプロセス、これからの展望」を指す。総合型選抜や学校推薦型選抜（以下、推薦型選抜）を始めとするこれからの大学入試に向けて、「マイ・ストーリー」を描き、それを語れる力を生徒に育む実践事例を紹介する。

1・2年次

「マイ・ストーリー」の軸づくり

やりたいことを見いだせるよう、選択の

場を設け、自分の内面と向き合わせる

東京都・私立桜丘中学・高校

マイ・ストーリー  
1・2年次  
の課題

- ・教科・科目の得意・不得意だけでなく、自分のやりたいことを見極めて進路選択ができるようにする
- ・進路選択に関する思い込みから抜け出し、自分の興味・関心と向き合って将来を考えられるようにする

✓ 校内外で様々な体験をしてこそ、  
自分の興味・関心が分かる

難関国公立大学や首都圏の私立大学の志望者が多い東京都・私立桜丘中学・高校は、「広げる進路指導」を基本方針とし、1年次から校内外で様々な体験をするよう、生徒に呼びかけている。生徒は、保護者や親戚の職業くらいしか知らず、教科・科目の得意・不得意だけで文理や志望学部を選びがちだが、職業や学問について十分に理解を深めた上で、「マイ・ストーリー」の軸となる自分の興味・関心を見極めてほしいと、進学指導部副部長の

友利啓智先生は語る。

「真剣に考えた末の希望進路であれば、多少の困難があっても、その実現のために諦めずに立ち向かうはずです。『深く知った上で、興味・関心がないと分かることも、進路選択において前進だよ』と生徒に伝え、とにかく多様な体験を積むことを促しています」

校内では、大学合同説明会や社会人のキャリア講演会などを実施。22年度には、企業と連携し、関心のある職業に就いている社会人に、生徒が個別に連絡を取り、オンラインで話を聞く相談会を新たに始めた。校外の活動については、高校生向けの大学のイベントや

コンテスト、ボランティア活動などの案内を一覧化し、クラウド上で生徒に共有している。それらの活動を通じて、生徒が自分のやりたいことを考えられるよう、同校では様々な工夫を凝らしている。

全員参加の進路行事では、生徒が何かを「選ぶ」過程を設けている。例えば、大学合同説明会では、「話を聞きたい大学」を2大学選び、社会人キャリア相談会では、候補者の中から「取材対象者」を選ぶ。選ぶ過程で自分が何に興味・関心があるのかを考え、活動に主体的に取り組むようにするねらいがある。面談では、「数学が苦手だから文系」「医療系は就職に有利」といった思い込みから抜け出し、自分がやりたいことに向き合えるような声かけを意識している、友利先生は話す。

「文系志望の生徒にも、理系学部のオープンキャンパスへの参加を勧めたり、医師志望の生徒に、その理由を尋ね、『弱者を助きたい』と答えたら、『福祉でも弱者を支援できるのでは?』と問いかけたりするなど、生徒の視野を広げることを大切にしています」

✓ 進路係や教師の個別の声かけで、  
情報を自分事として捉えさせる

校外の活動については、案内をクラウドにアップした後、朝礼で、各学級の進路係の生徒が各活動の概要を説明し、クラウド上の案内を確認するよう、他の生徒に促している。

## 「マイ・ストーリー」の軸を見いだすための1・2年次の活動と支援上の工夫

### 校内

- ・大学合同説明会（1年次は学問系統別、2・3年次は大学別）
- ・卒業生の進路講演会
- ・社会人のキャリア講演会
- ・オンライン社会人キャリア相談会
- ・海外大学進学説明会
- ・海外姉妹校の留学生受け入れ
- ・卒業生によるチューター制度
- ・「総合的な探究の時間」での探究学習 等

### 支援上の工夫

- ・全員参加の活動では、できるだけ選択形式にし、生徒が話を聞く先を選ぶ機会を設ける。
- ・希望する学問・業種・職業とあえて異なるものを見聞きするよう勧める。
- ・「興味・関心がないと分かることは、進路選択では大切」と生徒に伝え、多くの体験を勧める。

### 校外

- ・大学や企業などが主催するイベント、コンテスト、職業体験、ボランティア活動の案内
- ・学校行事：研究所見学／異文化研修旅行（2年次、北海道・九州・沖縄から選択）／東北研修（3年次）／海外語学研修／企業インターンシップ／地方創生プロジェクト等

### 支援上の工夫

- ・朝礼で、進路系の生徒が学校外のイベントの概要を説明し、クラウド上の案内を確認するよう、他の生徒に促す。
- ・進路係は参加状況を集約して、担任に報告。担任は各生徒の興味・関心を把握し、その後の指導に生かす。
- ・生徒一人ひとりの興味・関心や志向に応じて、担任がこまめに学外の活動を案内する。

### ポートフォリオへの蓄積

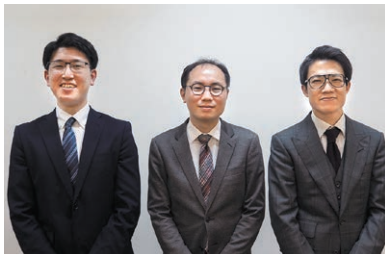
活動の内容や感想、気づきなどを文字と画像で残す。

### 志望理由書作成講座・面談講座

ポートフォリオを基に、「マイ・ストーリー」を組み立てる。

同校には4つのコースがあり、実施する活動はコースによって異なる。

※学校資料と取材を基に編集部で作成。



左から／古市達樹（1学年担任、2021年度3学年担任）、樋山陽亮（進学指導部部长）、友利啓智（進学指導部副部长）

### 学校概要

- ◎設立 1924（大正13）年
- ◎形態 全日制／普通科／共学
- ◎生徒数 1学年約400人
- ◎2022年度入試合格実績（現役のみ） 国公立大は、北海道大、埼玉大、千葉大、東京外国語大、東京海洋大、東京学芸大、岡山大、東京都立大などに52人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、中央大、東京理科大、法政大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ1244人が合格。

様々な体験を「マイ・ストーリー」につなぐ指導や、自分軸を探す体験重視の新設コースの取り組みなどを紹介！

VIEWnext ONLINE ▶▶



進学指導部部長の樋山陽亮先生は、次のように説明する。

「担任が伝えるよりも、クラスメートが伝える方が、生徒は情報を自分事として捉えるので、進路係を設けました。また、進路係は案内した活動の参加状況を集約して、担任に報告します。担任は、参加状況から各生徒の興味・関心を把握し、指導に役立てています」

面談等で生徒の志向を把握し、興味・関心を持ちそうな活動を、個別に、こまめに勧めていると、1学年担任の古市達樹先生は語る。

「自分に向けて話してくれている」と感じられれば、生徒の心は動き、コンテストなどの大きなイベントに挑戦する動機づけになります。自分の志向をよくつかめていない生徒には、たくさん質問をして話させることで、興味・関心が浮かび上がるようにしています」

体験の記録は、生徒が自分でポートフォリ

オに蓄積する。個人的に行った活動も、活動内容とその時に感じたことを入力するよう、生徒に繰り返し伝えている。

「興味・関心を持ったことや疑問に感じた点などを言語化することは、自分の思いを確認し、問題意識を掘り下げることにもつながります。また、志望理由書を書く時になって、体験の内容を覚えていなければ、書きようがありません。自分の記憶力を過信せず、都度記録するよう伝えていきます」（古市先生）

蓄積した体験を「マイ・ストーリー」の形にする場の1つが、2年次1月から行う志望理由書作成講座だが、その参加も希望制だ。

「自分の軸をいつ見いだせるかは生徒によって違いますし、期日設けるものではないと考えています。とことん試行錯誤し、納得できる『マイ・ストーリー』を描けるよう、生徒個別に支援しています」（樋山先生）

## 自立に向けた自己理解の促進

1・2年次

### 希望進路を率直に語れない生徒たち

厚生労働省が2022年に公表した、19年3月卒業の新規高卒就職者の就職後3年以内の離職率は、35.9%で、前年度より1.0ポイント低下しているが、高卒就職者の約4割が早期退職しているのが現状だ。早期退職の防止には、適性検査などによる自己理解、企業の採用担当者との面談などを通じた業界・企業研究そして職場体験や会社見学などにより、生徒の就職観を醸成し、それらを校内の個人面談で納得のいく志望企業選定につなげることが重要だ。しかし、現場からは、「高校までの学びや家族関係で様々な問題に直面し、自己肯定感を育めず、自分の希望進路を率直に語れない生徒が多い」といった声も聞こえる。そこで今回は、生徒が進路について気軽に教師と話すことができる空間を校内に設け、対話を通じて生徒の自己理解と自己肯定感醸成を目指す、宮城県・石巻市立桜坂高校の取り組みを紹介する。

#### 実践事例

### 傾聴を通して、生徒の自己理解を支援 宮城県・石巻市立桜坂高校

#### カフェのような雰囲気の中、 生徒が気軽に進路を語る

宮城県・石巻市立桜坂高校では、19年度から、進路資料閲覧室の一角を、生徒が自由に時間を過ごせる場所として、昼休みと放課後に開放している。その名も「進路相談スペースさくらかふえ」写真。そこで生徒たちは、おしゃべりをしたり、昼食を取ったり、隣接する進路指導室の教師や就職支援員に話を聞いてもらったりと、思い思いの時間を過ごしている。進路指導部長の遠藤則靖先生は、「生徒の主體的な進路選択を実現するためには、悩みや思いを自由に語れる場が必要だ」と語る。「採用試験に向けた模擬面接中、志望理由をつぶさに聞いていくうちに、生徒が突然涙を流すことがありました。保護者との関係、小・中学校での体験、そして東日本大震災での被災経験など、様々な悩みや思いを抱えているのにもかかわらず、それらを十分に聞いてもらえないまま、就職という



写真「さくらかふえ」では、教師や卒業生による進路相談（上）や、企業や上級学校の説明会（下）なども行われる。

進路選択に臨んでいる生徒が多いということに、本校に赴任して気がつきました」  
そこで桜坂高校では、19年度から進路指導部の重点テーマを「聴く」とし、生徒が気軽に立ち寄り、何気ない会話の中で自分の思いや悩みを自然に語れる場として、「さくらかふえ」を開設した。観葉植物を置く、BGMを流すなど、気軽に足を

## 図 「さくらかふえ」での生徒とのやり取りの例

**生徒** 今の自分はこの分野で働きたいと思っています。でも、母は、『あなたには無理!』と言って、きっと認めてくれないと思います。

**教師** それをお母さんに言ってみたの?

**生徒** どうせ駄目って言われるだろうから、言ってません。

**教師** 勇気を出して話してみない? 駄目って言われるかもしれないけど、まずは伝えてみようよ。

**生徒** ……

**教師** 自分の気持ちを伝えないうまま、社会に出て、大人になってしまっているの?

**生徒** それは嫌です。

**教師** じゃあ、自分にできることは何だろう?

**生徒** ……勇気を出して話してみる事です。

**教師** うん、話してみよう。先生は、お母さんと意見が食い違ってもいいと思っているよ。自分の考えを伝えることが大事だし、お母さんはきっとあなたの覚悟を知りたいんだと思うよ。

「実際に保護者に話すまで時間がかかる生徒もいますが、ほとんどの生徒は、保護者に自分の考えを話したと、私に報告に来ます。もちろん、保護者に否定され、言い合いになってしまうケースもありますが、まずは私は、『よく自分の考えを言えたね。今回の勇気は、あなたが自分で人生を選択する力につながると思うよ』と、心から生徒を褒めます。すべての保護者がすぐに子どもの考えを受け入れるわけではありませんが、多くの保護者が、それまでよりも子どもの話を聞くようになると、生徒の話から感じます」(遠藤先生)

### 取材にご協力いただいた先生、就職支援員

**遠藤則靖** (えんどう・のりやす) 進路指導部長

**伊勢みゆき** (いせ・みゆき) 就職支援員

### 桜坂高校進路指導部

**木村州哉** (きむら・しゅうや) 進路指導部副部長

**佐藤直幸** (さとう・なおゆき)

**松本紗季** (まつもと・さき)

**浅野善則** (あさの・よしのり)

**門澤芳恵** (かどさわ・よしえ)

### 学校概要

◎設立 2015 (平成 27) 年 ◎形態 全日制/普通科/女子校  
◎生徒数 1 学年約 130 人

◎2021 年度進路実績 (現役のみ) 4 年制大は、石巻専修大、仙台白百合女子大、東北生活文化大、東北福祉大、東北文化学園大、宮城学院女子大、麗澤大、京都外国語大などに延べ 26 人が合格。短大・専門学校進学 63 人。就職 42 人。

運べる雰囲気をつくり、入り口は常に開放している。実際、ちょっとした空き時間に「さくらかふえ」を訪れる生徒が多く、また、結果的に、進路資料の閲覧者数も増えたと言つ。

## 思いを聞いてもらえる場が、生徒の主体的な進路選択には必要

「さくらかふえ」の利用時間は原則として昼休みと放課後だが、始業前の空き時間もあえて開放している。始業前は「さくらかふえ」内に人がいないため、生徒もほかの生徒の目を気にしなくてよく、進路指導室の教師に話しかけやすいからだ。長くは話せなくても、ちょっと言葉と交わして、「じゃあ、続きは放課後に話そう」と教師が約束することで、生徒は安心して教室に向かえる。生徒

がぼろりと言葉をこぼし、それを教師が受け止める場所として「さくらかふえ」は機能している。最近増えているのは、希望する就職先などについて保護者と十分に意思の疎通ができない生徒だ。「私たちと話す中で、『親からはこの進路がよいと勧められたけれど、本当は自分はこの進路に進みたい』と打ち明ける生徒が多くなります。ただ、生徒にとって、自分の考えを保護者に伝えるのは簡単なことではありません。そこで、『そうですね。そういう進路を目指しているんだね』と受け止め、『その先は、どんな進路を描いているの? ぼんやりでもいいから、今の考えを聞かせて』などと、生徒の言葉に耳を傾けながら、保護者に話をしてみるよう促します(図)(遠藤先生) 就職支援員として週3日、同校を訪れる伊勢みゆきさんも、「聴く」ことの大切さを指摘する。

「大人は、生徒の考えを聞くよりも、こちらの考えを先に語ってしまいがちです。生徒は、そうした経験が続くと、自分のことを話そうとしなくなります。生徒にとっての心理的安全性は、大人が『聴く』ことによって確保されるものですから、生徒が自由に思いを語れる『さくらかふえ』は、自己肯定感が育まれやすい場所だと思います」

「『さくらかふえ』は、いつも生徒や教師でにぎやかです。本校の進路指導部は、若手教師が多いこともあり、隣の進路指導室にも足を運びやすくなったようで、1 学年生も気軽に進路の話をして訪れます。私たちに悩みを打ち明け、涙する生徒も多いですが、話した後は笑顔になり、『また来ます!』と言って、教室に戻っていきます。生徒は自分の思いを語りながら、自分自身を理解する場の大切さを実感していると思います」(遠藤先生)



# チーム 新課程 学年主任

Supported by  
ベネッセ文教総研

1月

2月

のポイント

本コーナーはハイスクールオンラインの〈先生SNS〉のコーナーと連動しています。〈先生SNS〉では、詳細の情報・資料をご提供しています。また、先生方が直面される課題やその解決方法の共有の場としてもぜひご利用ください。

## ハイスクールオンライン 〈先生SNS〉

<https://teacher.benesse.ne.jp/>



※ハイスクールオンラインのIDをお持ちでない先生は、校内でご確認いただくか、WEBサポートデスク0120-350124までご連絡ください。

【受付時間】  
月～金8:00～18:00 / 土8:00～17:00  
(祝日、年末・年始を除く)

ここからお入りください

ほかの先生に相談したい時は⇒相談室へ  
使える資料で負担軽減⇒資料室へ



# 生徒を多面的に捉えて総括し、第2学年に向けて準備する

「師も走る」12月、先生方におかれましては、一層ご多忙な日々をお過ごしかと存じます。

年明けには大学入学共通テストが実施されます。「あと2年」という実感も強くなる1・2月の指導ポイントについてまとめてみました。

1月は、次年度の年間計画・シラバスなどの作成準備に取りかかり始める時期です。先日公表された試作問題を校内で分析し、ここまでの指導を振り返って、計画通りに進んでいることと、十分に進んでいないことを整理し、第2学年に向けての体制づくりを検討することが求められます。改めて、自校で育成したい資質・能力とその育み方を、学年団として共通認識をもつことができるような場を設定してはいかがでしょうか。期末考査や実力テスト、校外模擬試験の結果なども踏まえ

て、それぞれの学校に合った2学年の指導方針を作成していただきたいと思えます。

入試に対する生徒の意識づけも重要です。共通テストの中から1年生でも解ける問題を抽出して取り組ませたり、1月に実施される「ベネッセ総合学力テスト」の結果を面談に活用して、基礎学力定着と苦手克服を目的とした学習計画を生徒に立てさせたりするのも一案です。

1・2月は、生徒の学力や学習習慣、生活習慣、進路希望など多面的に生徒を捉えて総括し、これからの見通しを立てる、とても重要な時期です。そして、3月は1・2月で考えたことを具体的に形にする時期になります。2学年に向けた準備ができるだけ早く進められるかどうかは、この1・2月にかかっているのではないのでしょうか。

## 1・2月のチェックポイント

数か月先を見通した新課程初年度学年ならではのポイントです。詳細はハイスクールオンライン〈先生SNS〉をご覧ください。

## 1~2月

### □ 新課程入試の留意点を踏まえる

- 入試科目の公表状況に応じた次年度以降の指導計画・内容を考える
- 試作問題を分析し、教科を超えて重要な指導ポイントを整理する(読解力など)
- 生徒や保護者に伝えたい科目選択のポイントと学習のポイント

### □ 2年次前半の指導の方向性を考える

- 1年間のまとめ・総括(生徒視点・教師視点)
- 学力・学習習慣・生活習慣の振り返り(1月実施「ベネッセ総合学力テスト」と「スタディサポート2年1回」の連携した活用)
- 地理歴史の「総合科目を「探究」科目にどうつなぐのか
- 教科・情報をどのように取り扱うか(2・3年次でどう取り扱うか)

テーマ

コンテンツ例

## 「情報交換会」 レポート

### 新課程1期生の学年運営で 大切にしていることを 先生方が話し合いました

先生方が濃密に情報交換できる場として、9月からオンラインで「テーマ別情報交換会」を開催しています。11月には、「新課程1期生の学年運営において、今、大切にしてい

ることを先生方が語り合いました。22年度の1学年主任ならではのテーマとして、「コロナ禍での生徒支援」「大学入学共通テストに向けたカリキュラム改訂」「総合的な探究の時間の企画・運営」などが挙げられました。生徒支援では、中学校時代に様々な活動に取り組めなかった分を取り戻すかのように、学校行事・部活動に打ち込む生徒がいる一方で、2学期中盤になって、疲れが見え始めた生徒もいるという声が聞かれました。さらに、「2単位科目が増え履修科目数が増加したことで、生徒の学習上の負担感が増している。年

度末の調査まで息切れしないように対策を考えたい」と、3学期の留意点を語る先生もいらっしゃいました。先生方に共通したのは、これまで以上に面談を重視していることでした。担任、教科担当、部活動顧問と連携して気になる生徒を抽出し、学年主任が面談を行う仕組みをつくり、学年主任が廊下で会った生徒とミニ面談を毎日繰り返していき、様々な工夫が紹介されました。そのほか、「探究的な学びに誘う授業での問い立て」に力を取り入れた取り組みなど、様々な話題で学年主任の先生方が語り合いました。

### ◎「テーマ別情報交換会」で話し合われたテーマ

1	新課程1期生をとりまく環境変化	コロナ禍、ICT教育、新課程、新課程大学入試、総合型・学校推薦型選抜の拡大など
2	新課程1期生の特徴	意欲的にグループ活動や対面での行事に参加する生徒が多い一方で、コロナ禍等の影響による長期欠席者や、自己肯定感が低い生徒も増加する現状
3	学年運営や教師間連携の工夫	ICT活用、総合的な探究の時間・LHRのあり方、カリキュラム遂行のための調整
4	学年主任としての生徒とのかかわり方	面談資料作成、学年主任面談の工夫、生徒への寄り添い方の工夫

## チームの仲間へmessage

### 学年運営は分掌を意識した引き算で！ ゴールである「進路実現」に向けて 教員の「得意」を引き出す



## 廣瀬和美

埼玉県・私立開智未来中学・高校 1学年主任

学年主任の役割は、進路指導や生活指導、教科指導、探究や学年にかかわる学校行事の運営など、全業務の舵取りをすることです。新課程入試を見据えた事前準備や、コロナ禍で生じた問題も多い中、時機を逸することなく、各業務を学年団の先生方に適切に配分していく見極めが重要です。そのためには、先生方の仕事の様子を日々拝見しながら（観察6割、対話4割程度）、各々の適性や得意分野を把握することが欠かせません。生徒指導に不安を抱えている教師がいたら、「ゴールは進路実現です。そこに至る道筋をしっかりと立て、生徒の話に耳を傾けてください」などと、最終目標を見失わないような声かけに努めています。学年団全員が同じゴールを見据えていれば、仮に小さな失敗があっても、その後の問題解決にチームであることができ、対応にも多くの時間はかかりません。先生方には、臆することなく、新しい挑戦をしていただきたいと思います。

本校は、中高一貫生と高校からの入学者とで学力差や経験差があります。その溝を埋め、希望進路に導いていくため、様々な取り組みを行っています。教職員全員が生徒一人ひとりのメンターとして参加する1年次のゼミ活動「才能発見プログラム」、2年次の海外フィールドワーク、毎年2月に中学1年生から高校2年生までが一堂に集まり、各学年で学んだことを発表し合う「未来TED（探究活動集大成）」、本校伝統の科目である「哲学」の授業……。いずれの取り組みにおいても、先生方の得意分野を発揮してもらえるように事前準備をし、早めに具体的なお願いをすることで負担感を軽減しながら、生徒に探究活動を進めるための素地を培っていきたくと考えています。



工業、農業、体育と、いつも以上に様々なテーマで取材した今号では、機械油、飼料、汗……たくさんの匂いに触れました（男子校、野球部出身の私。部室に充満した汗と制汗剤の匂いがすごかったなあと、当時を思い出し、年頃に気を配っていたあれこれがついでのに想起されました）。道中の新幹線では、時には弁当や香水の匂いが漂い、異国の言葉も耳にしました。観光シーズンの車中は、スーツ姿のビジネスマンだけでなく、服装も表情も多彩でした。そうした混雑が醸し出す「人いきれ」にも懐かしさを覚えました。

匂いは、オンラインで触れることができないものの1つです。紅茶に浸したマドレーヌが無味無臭だったら、こうして書き連ねたような連想も生まれていません。いつか記憶を呼び起こす呼び水になるかもしれない、そうした匂いの尊さを思った秋の取材でした。（河野）



VIEWnext  
電子ブック 高校版は

電子ブックで閲覧できます

『VIEW next』高校版、『VIEW21』高校版2020年4月号以降の記事は、電子ブックでご覧いただけます。ウェブサイト「VIEW next ONLINE」でご確認ください。  
HOME → 学校教育情報誌『VIEW next』  
→ 高校版バックナンバー

<https://view-next.benesse.jp/>

VIEWnext

高校版 2023年2月号

2月15日発刊

(予定)

『VIEW next』高校版は  
年6回の発刊です

先生方からのご意見を  
紹介します

## Reader's VIEW

2022年10月号へのご意見

### 教師は社会から多くを学ぶ必要がある

大学入試のみならず、現在の社会状況から学校教育全体を考え直さなければならぬと考えている。そうした中、10月号の特集に掲載されていた、高大接続改革を取り巻く環境変化の全体像は分かりやすく、今後を考える上で参考になった。大学入試だけにとらわれず、学校や教師が社会から多くを学ぶ必要性を強く感じた。 東京都立南多摩中等教育学校 徳武英人

### 生徒も教師も失敗から学びたい

10月号の特集では、高校での学びについて、大阪大学は「途中でつまずいたら、別のアプローチに挑戦し、よりよい解法を見つける」ことが、佐賀大学は「問題解決のためにどのような試行錯誤をし、失敗も含めてそこから何を学ぶか」が大事だとしていた。そうであるならば、京都府・京都市立堀川高校のように、生徒が失敗や間違いを認め、「分からない」と言い合える雰囲気があることが重要だろう。生徒も教師も、失敗しないようにするのではなく、失敗から学び、今後に活かしていくことが大切だと思う。 静岡県立下田高校南伊豆分校 谷野公彦

### ますます重要となる外部人材の活用

10月号の「指導変革の軌跡」で紹介された、愛媛県立松山南高校が行っている卒業生の活用に大いに共感した。これまで多くの学校を視察したが、過疎地域で教育を円滑に進めるためには、外部人材の活用が不可欠だ。視察先の中には、教育業務支援員の雇用を促進したり、卒業生や退職した教師が学習・部活動を支援したりと、校務をうまく分担している学校があった。探究学習で行われる地域や企業、大学との連携によって、生徒が外部人材から学ぶことは、教科書で学ぶことだけでは得られないものであり、生徒に大きな刺激を与えることができる。外部人材の協力をいかに得て教育活動を進めていくかは、極めて大事である。

岐阜県立加茂農林高校 渡邊強矢

### 「じりつ」に向けて、「あたり前」を見直す素晴らしさ

10月号の「輝く学年団を訪ねて」で、岩手県立葛巻高校は、「過度に手をかけない指導」という学年の指導スタンスを年度初めに発信していたが、「放任」と誤解されないよう配慮している点が素晴らしかった。今までのあたり前を見直すことができる職場環境に感謝しつつ、教師が生徒とともに新しい試みに挑戦していることに頼もしさを感じたし、「自立・自律」をひらがなの「じりつ」にしている点もよかった。

東京都・私立東京農業大学第一高校 小堀健一

### 生徒に自信を持たせて終わる授業に共感

10月号の「主体的・対話的で深い学び 授業実践」で、大阪府立泉大津高校が行った読書活動を基にした国語の単元構成は、国語科の教師の私にとって、とても役に立った。特に、解答できなかった生徒に再度問いかけて、答えることができた自信を持たせてから授業を終えるといった展開は、自分の授業でも実践したい。 愛知県・豊橋市立豊橋高校 安田雪絵

## VIEWnext 編集部からのお知らせ

## 2025年度大学入試に関するセミナーのアーカイブを配信

2022年11月11日、新学習指導要領に対応した2025年度大学入試をテーマとするオンラインセミナー「高大接続の視点で見通す2025年度大学入試」を開催しました。その模様をアーカイブ配信しています。ぜひご覧いただき、今後の生徒への指導や支援にお役立てください。



プログラム

第1部 情報提供 高校・大学入試・大学・社会のトレンドと、2025年度大学入試の見通し

第2部 パネルディスカッション 高大接続の視点で語り合う、これからの大学入試

パネリスト 青山学院大学 学長 阪本 浩 / 佐賀大学 副学長 <sup>にしこり</sup>西郡 大 / 山形県立山形北高校 1学年主任 鈴木佳徳 / 京都府・京都市立堀川高校 進路指導主事 滝本梨恵子(録画登壇)

◎アーカイブには、下記のURL、または右記の2次元コードからアクセスしてください。

<https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article13054/>



## VIEWnext ONLINE ウェブオリジナルコンテンツ 続々リリース!

TOPページ → 学校教育情報誌『VIEW next』からご覧いただけます。

本誌連動記事

「もっと知りたい!」の声にお応えして、誌面でお伝えしきれなかった内容をご紹介します。

これからの  
進路指導のための  
世の中トレンド解説  
今号 P.38 と連動

マイ・ストーリーを語る  
生徒を育む進路指導  
今号 P.48-49 と連動

ダイジェスト動画

誌面で紹介した授業実践が動画で見られます。今号は、「英語」と「体育」の授業です。

発問・課題設定をキーに見る

主体的・  
対話的で  
深い学び  
授業実践

今号 P.40-47 と連動



愛知県立豊田南高校の中島浩平先生による海外の高校生と対話する英語の授業。



鹿児島県・私立鹿児島修学館中学校・高校の白川達也先生による体育の授業。

アクセスはこちらから!

URL <https://view-next.benesse.jp/>

検索ワード

VIEWnext ONLINE

検索

2次元コード



VIEWnextのLINEを友だち登録いただければ、冊子の発刊時や新コンテンツの公開時に通知が届き、VIEWnext ONLINEの該当記事に、ダイレクトにアクセスできます!

VIEWnext公式アカウント

LINE@

友だち募集中!

友だち登録の方法は、右の2次元コードを読み取っていただくか、LINEアプリの「友だち追加」>「ID検索」で「@view21」とご入力いただき、追加をお願いいたします。



## 鈴木和恵 先生

静岡県立掛川西高校

Suzuki Kazue

## 挑戦する姿を

## 生徒に見せたい

## 実 践的な英語コミュニケーション能力の育成を目指し、洋書の英語教材を活用したオール・イングリッシュの授業に学校を挙げて取り組み、今年度で5年目になります。それまでの慣れた授業形態を変えることは、大きな挑戦でしたが、先進校の視察や研究授業を重ねて指導法を試行錯誤し、今では「掛西式英語教育」として、本校の特徴の1つになっています。

授業は、自分の好みや考えを即興で英語で表現する。ペアワークから始まります。「電車よりも飛行機の旅行の方がよいか」「飲食店で働く外国人留学生が増えてい

るが、よい傾向か」など、身近でありつつ、社会課題に関する話題を取り上げ、生徒同士での意見交換の後、私から回答例を数多く示すようにしています。多様な英語表現に触れるとともに、物事の多面性を捉えてほしいからです。また、自分で考え、自分の言葉で表現する過程は、自己理解にもつながります。そうした活動の繰り返しによって、自分のやりたいことや、その実現に向けてすべきことを明確にしていくってほしいと願っています。

授業はほぼ英語で進めていますが、今でも決して流暢には英語を話せない自分にも、もどかしさを感じています。しかし、不格好でも英語を話す私だからこそ、生徒にとっての英語学習のロールモデルになるのではないかと、私の回答例を聞いて、簡単な表現でも聞き手に伝わると分かれば、生徒は臆せず英語を話せるようになるのではないかと考えました。そして、生徒が英語を楽しむように話す姿は、私の挑戦の原動力になっています。



生徒より

## 英

語の授業は、食の好みから時事問題まで、自分の考えが問われる活動の連続です。1年生の時の活動で自分のことを考える習慣がつき、2年生の今は、ぱっと考えたことを英語で話したり、書いたりすることができるようになりました。鈴木先生が回答例を数多く示すことに力を入れてくれているので、様々な英語表現が学べるだけでなく、考え方も広がります。ニュースをよく見るようになりましたが、周りとの意見が異なっても、話し合うことで考えが深まるのが楽しく、自分が豊かになっていくのを感じています。

すずき・かずえ 教職歴21年。同校に赴任して5年目。2学年主任。進路課。外国語科(英語)。

静岡県立掛川西高校 全日制/普通科、理数科/共学/1学年約330人/2022年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、北海道大、東北大、東京大、静岡大、浜松医科大学、名古屋大、京都大、大阪大、広島大などに199人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大などに延べ1097人が合格。

お客様サービスセンター

フリーダイヤル 0120-350455 [受付時間] 月～金8:00～18:00/土8:00～17:00(祝日、年末・年始を除く)

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17